
ウィーンに出たあまのじゃく

フランシスローレイ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ウィーンに出たあまのじゃく

【Nコード】

N8403D

【作者名】

フランシスローレイ

【あらすじ】

20世紀末のウィーンで、イサムはヴァイオリン奏者のママと出会う。舞踏会、オペラ、青空市場。そして温泉……ギリシャの島にも。ところが、イサムの南米出張で二人は離れ離れに。(ウィーンの町の視覚的イメージが欲しい方は、dreamstimeを検索し、そのトップページにViennaと入力すると、たくさんの写真が掲載されています)

ウィーンに出たあまのじゃく

3・舞踏会

舞踏会の晩、冬のウィーンにしては、珍しく晴れ上がっていた。国谷イサム達の演奏する舞踏会の会場は、町の北を流れるドナウ河の向こう側の、新宿西口を少し閑散とさせたような摩天楼街にあった。

そこは東京の武道館のように広く、天井が高い。

イサムたちが駆けつけた頃には、既にたくさんのお客さんが集まっていた。

ウィーンっ子はおしゃれとは言い難い所があるが、オペラや舞踏会バルのような音楽系のイベントでは雰囲気作りにも貢献しようとするので、服装や立ち居振舞いが洗練されて見える。

男性は女性の引き立て役で、黒と白が基本。黒っぽい上下、白いシャツに蝶ネクタイ、そして「カンマー・ベルト」という黒い腹巻きをつけている。

舞踏会場より一段高いステージに入場したアルテドナウ・アンサンブルの楽士たちも、この日はかりはドレス・コードに従い、白と黒で統一していた。

そしてオーケストラの編成に従い、楽器毎に着席する。

イサムが見るとマミは既に、第二ヴァイオリンのグループにいたが、挨拶している余裕もない。

しばらくするとオーボエが、真ん中の「ラ」の音を出す。気付く薬と思いきや、他の楽器も同じ音を出してチューニングする。

開会を待つお客さんたちは、舞踏会場の周囲のテーブルでワインやシャンパンを飲みながら、ガヤガヤと歓談している。

いよいよ開会。

司会者の紹介を受けて「ウィーン菓子職人組合」の幹事役がマイクに上り、挨拶する。ジョークをまじえながら、にこやかに恒例

の式辞を述べる。

「因みに、今夜演奏してくれるのは慈善団体のアルテドナウ・アンサンブルと、美しきエリナーの率いるメッセンジャーズです」と、締めくくる。

そこで拍手喝采。

そうこうするうちに、会場がしんとしてくる。

ステージ中央の一段高いところで、アフロ・ヘアと口ひげのマスター・フィッシュマンがタクトを振りおろすと、アルテドナウ・アンサンブルがシュトラウスの「ウィーンの森の物語」を演奏し始める。

1 二 三 一 二 三 一 二 三
1 二 三 一 二 三 一 二 三
1 二 三 一 二 三 一 二 三

すると、それに合わせて、社交界入りする「デビュタント」達が真っ白なイブニング・ドレスに身を包み、蝶ネクタイ姿の若い男の子とペアで腕を組み、整然と並んで入ってくるではないか。

1 二 三 一 二 三 一 二 三
1 二 三 一 二 三 一 二 三
1 二 三 一 二 三 一 二 三

男の子はみな背筋を伸ばし、すました表情で右側の女性をエスコートしている。女の子達は何やら小さな白いブーケを右手に持っている。彼らが並んで挨拶し、踊る姿には、目を見張るばかりの初々しさと美しさ、そして華やかさ。

1 二 三 一 二 三 一 二 三
e i n s , z w e i , d r e i …… e i n s , z w e i , d r e i
……

e i n s , z w e i , d r e i …… e i n s , z w e i , d r e i
……

ウィーンに出たあまのじゃく

ワルツの王者、シュトラウスの曲が何曲か続き、デビュタント

達のお披露目が、終わりに近づいていく。

「いつ見ても、とても感動的だね」と、イサムがフルートを膝に置き、チユンさんにささやく。

「Yes, I know. Very sexy, too.」とチユンさんがにこやかに答える。

セクシーか……確かに規律がありすぎるのだろうか……と、感慨にふけるイサムであった。

間もなく舞踏会場が一般にも開放され、「美しき青きドナウ」の演奏をバックに、カラフルなドレスの女性達がペンギン気取りの紳士方とペアでいつせいに入場してくる。

リズムが四拍子に変わると今度は、シュトラウスの喜歌劇「こもり」序曲。

たくさんの老若男女がペアで、狂ったようにくるくると会場を巡る。その姿は、華麗かつ爽快そのもの。

女性方は、それぞれの華やかな衣装ですっかりおしゃまになり、「今夜こそ、私の美貌と才能をひけらかすの！」と自負するかのようだ。

「あ、萩谷だ。一緒にいるのは、多分、平原さんのお嬢さん」と、フルートが手すきの際に、イサムは仲間を発見。

彼の幼な友達の萩谷は、フロアの真ん中でピンクのミニドレスの若い女性と、気持ち良さそうに踊っていた。

あのくらい優雅に踊れると、日本人も結構サマになるものだ。平原さんはイサムの職場の上司だった。お嬢さんは大学生で、休みを利用して日本から遊びに来ている。

それにしてもあの二人、御両親公認のカップルなのだろうか……羨ましい限りだ……。

フロアでは、当の本人たちがリズムに合わせながら、言葉を交

わしていた。

「ウィーンは、始めてでしたっけ？」と言う、萩谷君。

「ええ……」

「じゃあ、舞踏会も始めて？」

「ええ。こんな季節に親元に来て、と思っていたから、感激！」
と、平原さん。

「良かったね……それにしても、上手だね」

「ちゃんと、リードして下さるからですよ……」

十時頃になると暫く休憩が入り、アルテドナウ・アンサンブルの楽士達は、ほっとしてステージから退場する。トロンボーンやクラリネットなど吹奏楽器中心のビッグ・バンドと交代。

イサム達のアンサンブルがこの土地ゆかりのワルツ、ポルカ、そして民族音楽を、そして「Eleonor and the Messengers」が、モダンなジャズ系の曲を担当していた。最初の曲は「真珠の首飾り」。

そしてこの時とばかり、短くカラフルなイブニング・ドレスの若い女性たちがそれぞれ、すまし顔のパートナーと共にはしゃぎ、そして踊り、体をくねらせる。

周囲の男性の、格好の目の保養ではないか。

「冬を吹き飛ばそう！」との気迫。皆、とても一生懸命であり、楽しそうである。要するに、ちよつとテイの良い大規模ディスコ。

少し間をおいて、女性のハスキーな歌声が聞こえてくる。

Moon river, wider than a mile

……

スリムでセクシーな金髪のヴォーカルが、エリナーだった。彼女は頬骨が高く、色白。深いスリットの入った、銀ラメ調のロングドレスを着ている。

I'm crossing you in style, so

me day ……

イサムは、チユンさんや津軽マミ、それからコントラバス奏者のキャロルを誘って夜食をとりに行くことにした。

「ねえ、向こう側でお寿司を売っていたわよ」と、ほっとした表情でマミが言う。

「行ってみようか」とイサムが反応する。

「お寿司？ いいですね！」とキャロルが声を上げる。彼女は南欧系のアメリカ人で、子供の頃に日本に住んでいたことがあるのだ。

「How about some sushi?」と、イサムがチユンさんに声をかける。

「Why not, with some wine, perhaps?」とのつぼのチユンさんが、にこにこしながら答える。

果たしてその出店は見つかり、イサム達はサーモンとかアボカドとかマグロとか、思いつくままに注文していった。立ち食いスタイルのその店は結構人気があり、たくさんのカップルが寄ってきてはサービス係の若者から寿司をさらっていく。

「誰か知り合いの方、いましたか?」と、イサムがキャロルに声をかける。

「IAEAの、かの有名なハンサム・ボーイがいたわよ」と、キャロルがうれしそうに答える。

チユンさんが、IAEAと言われてチラッとキャロルの方を見やる。まあ、フロアで踊っていた別人の話なのであるが。

「エリナーも、なかなか格好いいね」と、イサムがチユンさんに小声で言う。

「そう、ね……」と、彼が目配せする。

「彼女、少し下品じゃない?」と、これを耳にしたマミが牽制球を投げる。

気がつくのと、辺り一面に香水の香りが漂っているではないか。

「この間は楽譜を届けてくれて、助かったわ」と、彼女がイサムに

言う。

「いや、なるべく早くと思って……僕の方がウィーンに慣れているし……」

それから三十分も経たないうちに、ステージに戻らないといけなかった。

「トリッチ・トラッチ・ポルカ」と口ひげのマエストロ・フィツシユマンが大声で呼びかける。

イサムは一応気分良くチュンさんに挨拶しながら席に座ったが、いざ演奏を始めると、集中力が足りない。

アルコールが回って、マミのことを考えていたからだろうか。「大丈夫？」と言った風情で、隣からチュンさんが、チラッと目を光らせる。

そこでイサムは座る姿勢を正し、気合を入れ直すのであった。

三拍子。今度は四拍子。そして、あげくの果てには十二拍子。

金髪のエリナーたちと交代しながらとは言え、夜中の二時を通ぎると、皆もさすがに疲れてきてデスマッチ状態になりはじめた。マエストロ・フィツシユマンの代わりに、背の高いコンサート・マスターがタクトを振っている。

イサムも疲労のせいか、目の前の譜面台が、やけに光るような気がする。

フルートの演奏は、たくさん息を使う。際限なく風船を膨らませるように、消耗するのである。

四時半頃、フロアで整列した男女が手に手をつないで昔風の「カドリーユ」を踊る。

そこで、エリナーたちと最後の交代。

エリナーがMessengersの伴奏でスローな曲を歌い始める。

永遠のクラシック「ラストダンスは私と」だろう。

そこでイサム達は、チークダンスに興じる若いカップルをよそに、三々五々、目立たぬように会場から消えてしまう。

イサムはフルートをケースにしまいこみ、マミの様子を見に行つた。

「どう？ そろそろ、帰ろうか」と、楽器をケースに納める彼女に声をかける。

「ええ」

彼女の楽器ケースのMとTの大文字が、妙に自己主張しているように見える。

「アパートまで、送るよ」

二人は会場の外まで出るとタクシーを拾い、この間、楽譜を届けに来た彼女のアパートに向かう。

建物の前で、タクシーが止まる。

「マミちゃん……悪いけど、水を一杯くれる？」と、精魂つき果てたイサムがつぶやいた。

あたりは既に、ほんのりと明るい。

「寄って行くなら、どうぞ」と、彼女が言ってくれた。

「……ああ、助かる……」

タクシーが、去っていく。

彼女は黙ったまま、玄関の鍵を開けはじめる。深閑としており、鍵の音だけがカチャカチャ響く。

そこでイサムはだんだん、意識が朦朧としてくる。

階段を登り切ったところで、いよいよ眠気が襲ってくる。

ドアが開く。アパートに入り、居間まで来ると、イサムは倒れるようにソファに腰掛けた。

彼女が素直に、グラスで水を運んでくる。

「あ、どうも……」

彼がそれをうやうやしく受け取り、飲み始める。

ウィーンに出たあまのじゃく

彼女がナイトガウンに着替えて戻る頃には、彼は横になり、熟
睡していた。

「意外と、可愛いらしいのね……」と思いながら彼女は、毛布をか
けてあげる。そして身をかがめ、頬にキスをしてしまう。

4 オペラ

イサムはウィーンで、札幌の小学校のクラスメート、萩谷オサムと再会していた。それ以来、気のおけない独身仲間だった。昔から「イサム、オサムの漫才コンビ」で知られていた二人である。

ある晩、イサムはアパートを訪ねてきた萩谷と、土地の白ワインを酌み交わしながら放談していた。

「イサム、実は、ちよつと面白い論文を持ってきたんだ。この町でフロイトが始めた精神分析の話で……」と言いながら、萩谷はカバンから何やらクシャクシャツとした資料を取り出し、やおら読み始めるではないか。

「悪夢について。」

例えば夢に幽霊が出てくる場合、二通りの可能性がある。

一つは、本物の幽霊が出るケース。これは幽霊を信じる人でないと、論じる資格がないので、その道の専門家にお譲りしよう。

二つ目の可能性は、にせ幽霊。

この場合は、潜在意識のイタズラに過ぎない。

この世の常識だが、人間には意識と潜在意識の両方が備わっている。

潜在意識は、脳幹にいる。筋肉を動かすことはできないが、自律神経系とつながっている。

意識は、大脳皮質に宿る。逆転現象で、筋肉の運動を司るが、自律神経系とはつながっていない。

昼間、起きている時は、筋肉そして体を動かしながら生活し、勉強し、また働くわけだが、夜、意識は眠っても潜在意識は起きていて、引き続き自律神経系を使い体調整備にあたる。

しかるに睡眠は、外気や外敵から守られる屋内（寝室）で取るので、環境は安定的。潜在意識は仕事もあまりなく、どうしても暇を持てあます。

そこで普段、好き勝手に筋肉を動かせない鬱屈感を晴らすため、まるで映画監督のように夢を演出し、自己実現を図るのだ。

演出が過ぎると悪夢となり、幽霊が登場したりする。

そして当の本人は、そのからくりを見抜けず、本当の幽霊と錯覚して恐怖におののく……」

ここまで来て萩谷は顔を上げ、

「この話、どう思う？」と尋ねた。

イサムは少し不愉快そうに、

「潜在意識のいたずら？ であらめっばいね」と反応。

「確か、夢は瞳が忙しく動くレム睡眠時に見るんだよ、起きる直前に……」とつぶやきながら、萩谷が続きを読み始める。

「しかるに、起きている時にも潜在意識の強く働く人たちがいる。これが、女性や芸術家に多い分裂気質。

彼らは総じて、自意識過剰かつ気まぐれと言えよう。何故かと言つと、意識と潜在意識が、同時に外界に反応し作用するから。

太郎のそばに、分裂気質の花子がいたとしよう。

太郎を認識する主体は、花子の本来の意識（花子A）のみならず、潜在意識（花子B）。言ってみれば花子は、太郎を二重に意識するのである。

同時に花子Aは花子Bを意識し、花子Bは花子Aを意識する。

すると花子の行動や言動はAとBが相まみえ、総じて奇妙奇天烈、自意識過剰で気まぐれ……」

居たたまれず、イサムが言葉を挟む。

「それより萩谷、この間は平原さんのお嬢さんと、とっても良い雰囲気だったなあ！」

「えっ？ とんでもない！ 彼女には、つきあっている奴がいるらしいし……」と、萩谷が顔を上げながら答える。

「いいなあ。ダンスがうまいと、便利なんだろう？」

「いやいや、お前こそ……この間のバルの帰り、せつかくマミちゃんを送っていったのに……噂では……」と言いながら、萩谷は突然

ニヤリとし、ついに、

「ウワツハツハツ！」と、声を立てて笑いこける。

イサムは、慄然としている。

「だらしのないなあ、お前……朝帰りになりながら！」

「翌日、出勤で……」と、イサムが弁解を試みる。

「今度は彼女をオペラに誘って、本当に王手！ な？ 正しく、真面目にマミAとBを攻めるよな！」と、萩谷はおおるのであった。

イサムが国立オペラ座のウェブサイトを見ると、アルテドナウ・アンサンブルが練習に取り掛かる予定の「フィガロの結婚」の公演が入っていた。

オペラは高いので、津軽マミのような学生は、立ち見が多かった。

そこでイサムは、くつろげるような席を手配し、彼女を招待するメールを打ち始める。

「津軽マミさん、しばらく会わないけれど、お元気ですか。

国立オペラ座の切符が手に入りました。

再来週の火曜日の『フィガロの結婚』だけど、一緒に見に行きませんか。

オペラの幕間に、女神の彫像が並ぶテラスでシャンパンを飲むよ。

きっと、お姫様のような気分になれるから……。

谷イサム」

彼女から返事が来たのは次の日、それも夜中の十二時頃だった。

「国谷さんへ、

フィガロの結婚、喜んで見に行きます。どうぞ宜しく

津

軽マミ」

「イヤーツホーツ！ やったぞ！」と、狂喜乱舞するイサムだった。そこで彼は思わず、モーツアルトの「フィガロの結婚」から「恋を知る君は」のアリアを口ずさんでしまった。

「 VOI , CHE S A P E T E …… C H E C O S A E A M O R ? 」

ドーソ、ソオ、レー、ソー……ミィイ、ドレーミーファ、レー……。

恋とは何なのか、あなた方は知っているのに、かあ……そうそう、どいつもこいつも古今東西、昔から！」

約束の当日は雪で、夜になっても降り続いていた。

七時前にイサムが国立オペラの建物に入り、プログラムを買ってから玄関先に戻ると、こちらに向かってくるマミを見つけた。

彼女は、この間に一緒に買った、白と茶色の毛皮の帽子を被っている。

「やあ、お久しぶり！」とイサムは、手を振りながら彼女に呼びかけた。

「こんばんは！」と彼女は、少しびっくりした様子で答える。いつものグレーのコートが、粉雪で白くなっている。

「雪の晩なのに、申し訳なかったね」

「いいえ。そんなこと、ない」

「その帽子、なかなか良いじゃない」

「そうなの、お蔭様で！」

彼は、入り口のところで彼女にコートや靴の雪を落とさせ、建物の中に連れて入る。

そして二人で、豪華な大理石の階段をのぼっていく。先を行く彼女が足を踏み出すたびに、黒髪がゆれる。

階段をのぼる時は女性が先、下りる時は男性が先だった。「か弱き女性」を予期せぬ転倒から守るための習慣だろう。

クロークの前で外套を脱ぐとマミは、例の深緑で襟の黒いパンツ・スーツ。今夜はそれに、真珠のイアリングをつけている。

イサムはダーク・スーツに保守的な感じのタイ。

コートを預ける。

切符を見せると、一階の真ん中、舞台に向かって少し右の方向を示してくれた。

劇場に入ると、既に、たくさんの観客。

イサムが申し訳なさそうに、周りに気を配りながら彼女を誘導する。

「インシューリグング」

「すみません」

どうしても、手前の観客を立たせてしまうのだ。

舞台がよく見える席だった。

「今夜は、よく来てくれたね」と言って、イサムが彼女にプログラムを渡した。

「あ、どうも有り難う」と言いながら、彼女が嬉しそうに受け取る。

イサムがマミの声を間近で聞くのは、とても久しぶりのような気がする。

「元気になっていた？」と言ってイサムが彼女の顔色をつかがう。

「うん。貴方は？」

「そうね、元気。でも、仕事が忙しくてね……」

「私も」

「知っていると思うけど、舞台はスペインのセビリアで、アルマヴィーヴァ 伯爵のお屋敷なんだ」と、イサムがささやく。あらかじめ、調べてあるのだ。

「そう、そう」と、彼女がうなづく。

彼がすぐ目の前の、せりふ翻訳用の小さなスクリーンを見ると、どうしても彼女の伸びやかな足やひざを意識してしまう。

「アルマヴィーヴァ伯爵がセクハラオヤジで、スザンナに気があるのよね」と彼女がつぶやく。

その横顔は、素敵だった。

いよいよ「フィガロの結婚」序曲が始まり、紫色のとても重そうな緞帳があがっていく。

舞台装置は十八世紀調で、古典趣味。

鏡に見入っているスザンナをよそに、フィガロが何やら床の寸法を測っている。
「フィガロが、

スザンナと結婚してから住む部屋にベッドを入れるために、部屋の寸法を測っているんだ」と、イサムがささやく。

「確か二人とも、伯爵の使用人で……」

「スザンナは、伯爵夫人の召使だよ……」

舞台装置も派手な衣装も大変見栄えがするし、オーケストラの小粋な伴奏を伴うそれぞれのARIAは、非常に華やかでインパクトがある。

それでも役者が歌と共に次々と出入りし、椅子の陰に隠れたり出てきたりするので、イサムもさすがに舞台への関心が薄れ、すぐ隣にいる彼女の表情や息づかいばかりが気になりはじめるのだ。

イサムをようやく目覚めさせてくれたのは、第二幕目でケルビーノが歌う、例の有名なARIAであった。

「VOI, CHE SAPETE…… CHE COSA
AMOR?」

ケルビーノはありとあらゆる女性に惚れてしまう、伯爵夫人仕えのとても若い小姓だ。

「私の愚かな恋を責めるけど、皆さんも恋の何たるか、御存知でしょうか?」と訴えているらしい。

これにはさすがのマミも感動するらしく、隣で涙を流しているような気がする。

幕間の休憩時間になり、観客が次々と席を離れていく。

「少し、テラスに出てみない？」と、イサムが彼女に声をかける。
「ええ、そうね」

そこで二人一緒に席を立つ。

かの有名なテラスは、広々とした、天井の高いバルコニーになっている。

二人がそこでグラスを傾けたのは、イサムの計画通り、シャンパンであった。

雪は既にやっている。

おぼろげなる光が薄い雲のすき間から射しこみ、バルコニーの広い手摺り部分に、等間隔で立つ女神たちを照らし出していた。

「ああ、ここまで来ると、少し解放されるね」とイサムが言う。

「雪もやんだし、とても素敵……」とつぶやきながら彼女が目を輝かせる。

二人の息が白く見える。あちらこちらで、カップルが楽しそうに歓談している。

「それにしてもオペラって、筋が分かりにくいよね、何回見ても……」と彼が持ちかけた。

「そう。とにかく、これからスザンナが伯爵夫人の洋服を着て、伯爵夫人がスザンナの洋服を着るの。そうやって、スザンナにアプローチしようとする伯爵を欺くの……」

「え？」と彼が分からないふりをした。

「結局、秘密の逢い引きは、自分の奥さんとしちゃうのよ」

「ところでセビリアの理髪師、見たことある？」と彼が尋ねてみた。
「あれも好き。ロッシーニって、音楽がモーツァルトに似ているわよね」

「話が続いているし、彼を意識して作曲したんだろうね」と、彼は躊躇しながら答えたが、プロと話していることを意識し、恥じらってしまう。

マミが笑みを浮かべた。

「そう。確か、セビリアの理髪師では、アルマヴィーヴァ伯爵がまだ独身で、ロシーナを追いかけているの」

「それで、ついに結婚？」

「そうなの。その時、理髪師のフィガロが伯爵を助けてあげるの。だから、論理的には今夜の伯爵夫人はロシーナだし、フィガロは伯爵の恩人なの……」

「そうしたら、この伯爵、どうしようもない奴だね……」

暫くすると休憩時間の終わりを気にしながら、カップルが次々と本館に戻っていく。

寒くなってきたイサムたちも、席に戻る。

第三幕。

フィガロの借金返済の代わりに結婚を迫られている相手のマルチエリーナが、実の母親であることが分かるシーンまで来て、イサムの忍耐も峠を越えてしまった。

つつい、欠伸。

そこで彼女が、肘でこづいてきた。

「あ、いけない……」

長い演目も、ついに第四幕目となった。

アルマヴィーヴァ伯爵の強引なアプローチにも関わらず、スザンナは結局フィガロとめでたく結ばれ、見事なハッピーエンドに……。

最後には、大合唱で幕が下りた。

しばらくするとキャストが一人ずつ出てきて挨拶をする。その度に拍手喝采が！

最後にスザンナ役が指揮者への拍手を促すと、管弦楽団の連中もそこで立ちあがり、やんや、やんやの拍手を受けた。

既に三時間以上経っている。

イサムがマミを見やると、彼女は少しほっとした面持ちで、目

を合わせてきた。

みんな解放感にひたりながら、がやがやと席を立ち、劇場から外に移動しはじめる。

外に出ると、そこは別世界。

「うわあ、寒い！」

二人はすばやくタクシーを見つけ、雪の道の上を駆け寄り、うまく乗ってしまう。

そして、二人はタクシーの中で、お互いの手を固く握り締めた。

5・青空市場

ウィーンのナツシユマルクト地区には青空青果市場があり、最寄り駅は、地下鉄のケツテンブリュッケンガッセ（ケツテン橋通り）だ。この界限は、毎週土曜日、大規模な蚤の市が立つので有名だ。

当日は、オーストリア周辺の国のみならず、イスラム圏や東洋からも移民や出稼ぎ労働者が集まり、一種独特の怪しげな雰囲気にも包まれる。そしてこの日は革ジャンにジーンズ、それにくわえタバコが制服になるのである。

西暦二千年にもなりながらウィーンには相変わらず安全神話があったが、ここだけはスリや詐欺師が、今にも出そうな雰囲気。

陶器やガラス、油絵、古いポスター、怪しげな彫刻、古銭、写真立て、ビーズ、化石、CD、アナログ・レコード、セーターやジャンパー、古い家具等、中古品や骨董品が、露店で所狭ましと並べられる。そして、招き猫の代わりに、男女の交わりを描写した絵画や彫刻が目立つところに飾られるのだ。

マイセンやヘレンドの掘り出し物を目当てに、観光客がカメラ片手にガヤガヤ集まってくる。

通りの向こう側には、中華料理屋さんやお寿司屋さん、日本食品店などが点々と並ぶ。カトリック社会の外縁で生活する人々が行き交うため、とてもエキゾチックだ。

国谷イサムのアパートは、この近くだった。

イサムが津軽マミを誘ったのは、四月の初めで、ちょうど蚤の市の立つ土曜日だった。

四月にしては、良く晴れて暖かい日だった。

彼は早めに起きてシャワーを浴び、更に目を覚ますために、ラジオを大音響で聞きながら、朝食をとっていた。

“ Oi , oi , oi , oi ! Bulgarian ba

by!
Oi, oi, oi, oi! Bulgarian doll!
”

随分と古い感じの曲だなあ、と思いながらイサムはコツペパンのようなセンメルを、地元流に裏側のお臍の部分からちぎっては頬張り、ミルクをたくさん入れたコーヒードで流し込む。

“ Oi, oi, oi, oi! Bulgarian baby!
Oi, oi, oi, oi,
Oi, oi, oi, oi, I love you!”

イサムは、

「今日は、ラッキー。少しはきれいにしよう……」とつぶやきながら、その辺のものを片づけはじめた。タベのお皿、オペラのCD、手紙等、雑多なものが散乱している。一週間の間には結構、散らかるものだ。

彼は、この日を随分と夢見たものだ。

舞踏会のあと彼女のアパートにたどりついたら、ソファに倒れこんでしまつて……毛布を掛けてくれた時、何だかキスをされたような気がするのに、白雪姫と違って眠りからさめることが出来ずじまい。

そして、オペラの晩も、彼女をアパートまで送つていったら、隣のお婆さんが間違えて出てきてしまつて……。

フランクフルター・アルゲマイネ新聞の芸能欄を読んでいるうちに、彼女を出迎えに行く時間が来る。十一時の約束である。

イサムは、すり減った石の古い階段をかけ下りて、狭い中庭を閉ざしている大きく頑丈な木の扉を開ける。

駅にたどりつくと、周辺には若者がたくさんたむろしていた。

週末の買い物に来ている外国人のカップルも多く、特にアジア系の

人たちが目立つ。いつもの土曜日のことながら、何やら華やいだ、そしてスケベったらしく不健全なムード。

通りにちらかったビンや缶からこぼれ出たお酒や強いタバコ、そしてエキゾチックな香料の匂いが、鼻を刺激する。

マミは、少し遅れてやってきた。

「やあ、お久しぶり！」と彼が叫んだ。

「待たせてごめん！ ケーキ買っていたら、遅くなっちゃったの」

「休日なのに、申し訳なかったね」

「ううん。随分と、人が多いのね」

「うん。市が立っているからね」と、彼が答える。

「あ、そうなんだ」

「実はここまで来ると、家賃も少し安いし」と、イサムが自嘲気味につぶやいた。

そして彼は雑踏をかきわけ、マミをすすけたオレンジ色の建物まで案内する。

しばらくして向こうの方に、白と赤の小さなオーストリア国旗が見えてきた。

「あの旗は、なに？」と、彼女が指さしながら尋ねる。

「あんまり指さない方がいいよ。あれは多分、シューベルトが亡くなった家」

「へえ、中はどんな感じなの？」

「ピアノが、置いてあったかな」と、気のなさそうにイサムが答える。

「シューベルトの霊が乗り移ると、いいんだけど……」

「えっ？」

「ほら、オーディションで、最終選考の課題曲がシューベルトですよっ？」

イサムは鍵を差し込み、アパートの門の、木の扉を開く。

中は日陰で、異様に寒かった。四角い中庭が見える。

「昔は、ここから馬車が入りたらしいんだ。」

「へえ……この階段も、随分とすり減っているわね」

「二百五十年くらい、古いらしい……」と言いながら、イサムは先にのぼりはじめ、彼女がついてくる。

踊り場まで来ると、彼のアパートのドアがあり、そこで彼が鍵を差し込む。カチャツという音が、あたりに響く。

ドアを開きながら彼は、彼女の腰にそつと手を当てる。

「どうぞ」

「邪魔します」

彼女は少し不安そうだ。

中は、とても暖かい。ついさっきまで、イサムがいたから。

壁は、緑色に白を混ぜたようなウグイス色で、最近ペンキを塗ったばかりの風情。

椅子もテーブルもみすばらしい。一応目を引くのが、頑丈で重たそうな木の譜面立てだった。古い上、青空蚤の市で更に風化したのだろうか。

「へえ……意外と静かなのね」

彼がもう一度ヒーターをつけている間に、彼女は部屋をぐるりと見まわす。

「しいんとするもんだから、練習の時は、とても気を使うよね……」

隣のお婆さんには時々差し入れするけれど、いつも機嫌がいいとは限らない……さすがにウィーンは、音楽系には寛大だろうけど……」

と、彼が説明する。

「分かるわ、その感じ」

「この部屋、最近塗り替えたんだけど、分かる？」と言うイサムは、少々自信ありげだった。

「悪くないんじゃない、明るくて」

「そう？ 良かった……コート、もらおうか？」

彼女は白と茶色のウサギ毛の帽子を取り、いなくなきように髪をふりほどいた。そして薄いグレーのコートを脱ぎ、マフラーを取る。

茶色いセーターの下には、白いブラウス。

彼女は上のボタンを一個丁寧にはずすと、ほっと息をついた。「ええと、スリッパはく？ 一応、和式で」と言う彼は、いつの間にか靴を脱いでしまっている。

マミが床に目をやると、確かにスリッパが並んでいる。そこで彼女はしかたなくブーツを脱ぐことにした。

彼女が少しかがみながらブーツを脱ぎ始める。そこで、イサム視線が妙に気になった。黒いスカートの下から、形の良いふくらはぎがのぞいている。

「久しぶりだね」

「そうね」

彼女は苦笑し、ブーツを脱いだ細長い左足を伸ばし、イサムの足を軽く踏んでみた。彼はその足のぬくもりを感じると、彼女の腰に手をかけ、身を寄せてきた。

彼女はそのまま、しなやかに後ろの壁にもたれかかり、顔を向けたまま目を閉じる。

二人は、しっかりと抱き合う。ロダンの彫刻のような、熱い接吻。

肌のぬくもりが行き交い、鼓動が通じ合う。

心臓が高鳴り、えもいわれぬ強い興奮が訪れはじめる。

ところが、そこでベートーヴェンの「喜びの歌」が突然鳴り出した。

しつこく鳴り続けるので、イサムは彼女の手を握りながら、身を振り払う。

「はい。国谷ですが……」

「平原です。お休みのところ申し訳ない。支店長が来週の火曜日から一週間、パリに出張することになったらしい。アレンジをお願いして大丈夫かな、ちよつと急だけど？」

「本間支店長が？ 来週の火曜日からですか？」

「そう。急にパリの欧州支配人からお呼びがかかったらしい」と平

原さんがきつぱりとした口調で言った。

「分かりました、手配します」

「申し訳ないけれど、宜しくお願いするよ。彼のフライトとか宿とか、すぐに手配した方がいいかも知れないね」と言う平原さんは、いつものようにそつがない。

「やっておきます。何の会議でしょうかね？」

「おそらく、世界ワイン・オリーブ協会の話だと思うけどね」

電話が長引きはじめたところで、マミは「いい？」とイサムに指で示し、キッチンの方に姿をくりました。

彼女が帰ってきたところで、イサムはようやく電話を切ることができた。

「ごめん、タイミング悪かったね」

「出張するの？」と彼女が問いかけた。

「実は俺じゃなくて、支店長が急に、パリに出張することになったんだ。何でも、世界ワイン・オリーブ協会と言うのがあって……」

地元の航空会社が休みらしいので、イサムは、机上のパソコンに向かう。

ネット上で色々と検索すると、航空会社の派手なロゴがスクリーンに浮かぶ。

しばらくすると彼は、

「よし、予約できたぞ！」と言って嬉しそうに手をたたき、彼女の待つキッチンに入ってしまった。

「うまく行った？」と食器棚で何か探していたマミがつぶやく。

「やっと取れたよ」

そこで彼女は、持ってきたケーキを箱から出しはじめた。

「ああ、有り難い」とイサムがほっとした表情で言う。

二人で気分を変えて食べるデザートのお菓子は、なかなか味わい深かった。

「このケーキ、いつも感動的だね」とイサムが満足そうに言う。
「そう。ふわーっとしていて、私も好き」
「フルートは、いつからやっているの？」と、彼女がマグに紅茶を注ぎながら聞いてくる。

「小学校以来。高校時代は中断したけどね」と彼が答える。

「よく続いたわね」
「情性だね」

「美人の先生がいたとか？」と、彼女がいたずらっぽく聞いてくる。
「そういう時期もあったかもね。大学の頃、新宿でレッスンをとりながらオケに入ってたね……」

「やっぱり……」

「指揮者のフィツシユマンさん、どう思う？」とイサムが水を向けてみた。

「父の知り合いなの……」

「へえ」と答えながら彼は思わず、したり顔になる。

「なかなか中年にしては、カッコいいと思うわ。でも、日本人とは違うわね……戸惑うこともある」

「ドイツ語だし、彼のスタイルにまだ慣れていないからだよ」と言っ
てイサムが彼女を諭す。

「そうかも知れない。あのアフロ・ヘアと口ひげが絶妙ね」

「多分、ヨハン・シュトラウスを気取っているんだよ」

「ところでウィーンって、やっぱり乾燥しているせいかしら、音の響きが違うわね。自分の声もよく響くの」

「そうだなあ……建物が石だから、良く響くのかな……だから、音楽の都が成立するんだろうね……」と言ってから、イサムは窓を開け、顔を出してみた。行き交う人々のざわめきが入ってくる。

「蚤の市に行ってみない？」と、彼がもちかけた。

二人は散歩がてら、表に出ることにした。

通りになると、青空と太陽。

イサムとマミは手に手を取り、駅を目指して歩き始めた。

あちこちに露店が立ち並び、観光客で賑わっている。

トルコ人やギリシャ人がやっているような、スパイスや香辛料が山積みになった店とか、野菜や果物、ナッツを売っている店があり、興味は尽きない。

「この辺、ああ見えて意外と不健全なものも売っているから、気を付けた方が良さんだ」と、イサムが意外なことを口走る。

目の前の店では、これ見よがしに羊肉を焼いており、トマトやたまねぎと合わせた大きなサンドイッチにして売っていた。

「結構、誘惑されるわね」

「ツヴァイ、ビツテ」

二人のサンドを待つイサムが、ふと通りの向こうに目をやると、なんと、見慣れた茶色いアフロ・ヘアと口ひげの男がいるではないか。

「うわさのマエストロじゃないか」

「あ、本当だ！」と彼女が黄色い声をあげ、あわてて手で口を抑えてしまう。

マエストロ・フィッシュマンは、カーキ色のコートに黒いブーツ、そしてロシア風の毛皮の黒い帽子との出で立ちだった。

「時々、この辺で出没するんだ。結構、ガラクタあさが好きみたい」

マエストロは、店の主人と何やら値段の駆け引きをしていた。手にしているものが日の光を受けて、キラキラ輝く。

「あれは多分、水晶だね。アルプスで採れるんだよ」と、イサムがつぶやく。

ちようどそこで、取引が成立した模様だ。

「どうも、こちらを意識したようだね」とイサムが言った。

「いやあだ……フィッシュマンさんって、独り者だっけ？」

「そんな噂だよ。彼はルーマニア系で、若い頃、エラく苦労したらしい」

ウィーンに出たあまのじゃく

包みをもたらったマエストロは、お店の人と握手し、足取り軽そうに立ち去っていった。

「私たちに気がつかない振りしたわね」

「それがウィーン流だよ……それに意外と、シャイな人なんだ」

「気を使ってくれたのよ、きつと」

6・温泉保養地へ

五月になるとウィーンもようやく暖かくなり、春の到来が感じられるようになった。

土曜日の朝早く、マミは五つ年上のお兄さんのジュンを出迎えるため、イサムと共にウィーンの国際空港にいた。

「お兄さんは、どんな仕事をしているの？」とイサムが彼女に尋ねてみた。

「実は、アパレルの会社で……ミラノ出張は多分、布地の買い付けだと思っわ」

「そろそろ、出迎えに行こう」と言っつて、イサムは彼女のジープンのおしりをポンとたたいた。

ミラノからの便が到着すると、津軽ジュンは早めに税関から出てきた。

重そうな黒いスーツケースをカートに乗せて押しながら、妹をキョロキョロ探していると、離れたところに長い黒髪の女性がいた。

彼女は、こちらに向かって手をふっているではないか。

「お兄さん！」

「やあ！」

久しぶりに見るマミは笑顔が少し大人っぽくなり、綺麗になっていた。そのすぐ隣には、体格の良い日本人らしい男性がいる。こちらはとりすました表情であった。

「マミ！ 元気?!」と津軽ジュンがもう一度手を振りながら叫んだ。

「お兄さんも元気そうね！」

ジュンはカートをもう一押しし、ゲートから完全に出てしまう。思わず顔がほころんでしまう。

「こちら兄です」と、マミがイサムに紹介する。

「始めまして、国谷です」と、イサムがお辞儀する。

「津軽です。どうぞ宜しく」

「実はねえ、国谷さんが車を借りてくれたの。お兄さんさえ良ければ、このままバーデンまで行くけど、どう？」とママが自信ありげに言った。

ジュンは、少しびっくりしたようだ。

「バーデンって？」

「温泉保養地なの。風光明媚なところで……ここから三十キロ」

「ホテルは？」

「夜の到着でいいかしら？ 町中に入ると大変なの、一方通行だから」

「分かった。天気もいいし、遠足にしようか」と、ジュンは彼女の薦めに従うことにする。

「じゃあ早速、出発！」と、ママが号令をかける。

三人は空港の構内を抜け、駐車場のフォルクスワーゲン・ゴルフまでたどりつく。その色はグレー。

イサムが手早く荷物を載せるのを手伝うと、すばやく運転席に戻る。助手席にはジュンがすわり、後部座席にはママが。

「国谷さんは、ウィーンっ子ですか？」と、ジュンが尋ねた。

「もう、抜けないでしょうね、この雰囲気」と、彼が答える。

イサムは運転用のサングラスをかけている。紫外線が強いのだろうが、少し不良っぽい感じもする。

「お仕事は？」と、ジュンが尋ねる。

「ここの商社勤めなんです」と、イサムが少し言いくそくに答えた。

「住み心地は、如何ですか？」

「観光地だし、音楽好きなので退屈しませんね」

「楽器とか、やるんですっけ？」

「フルートを少し……実は、妹さんと同じ楽団なんですよ。でも、プロはだしと一緒にだと、立場ないですね」

「そんなこと、ないわ」とマミが後ろから言う。そして、

「兄はピアノを弾くの」と続ける。

「音楽に、縁が深いんですね」と、イサムがくぐもった声で言う。

「実は、祖先に音楽好きなロシア人がいたんです」と、ジュンが教えてくれた。

「ロシア革命の頃、満州に逃げて来たんですって」と、マミが言う。そして、

「お母さん達、元気？」とジュンに尋ねる。

「とても元気だよ」

「メールの感じでもそうだね。だけど、時々寂しいって言うの」

イサムが、ぐんぐんスピードを上げていくが、行けども行けども、周りに高い建物が出てこない。

郊外に出たところで、一面鮮やかな黄色の、菜の花畑が現れた。

そこでジュンがふつとため息を漏らし、後ろのマミに尋ねてみた、

「ところで、アウガルテンとの話はどうなっているの？」と。

「あそこは、六月にオーディションなの」と、ぶっきらぼうに彼女が答える。

「ウィーン・フィルは？」

「そんなところ、受ける訳ないでしょう？ 女性を入れられないんだから。受けたのは、コンツェルト・ハウス管弦楽団」と、マミが開き直って答える。

イサムがラジオをつけると、ちょうどディーブ・パープルの曲がかかっていた。

「結構なスピードですね」と、速度計をのぞきながらジュンが言う。ヨーロッパの右側通行に、まだ慣れていないのだ。

バーデンに到着すると、あたりは緑豊かな保養地だった。歩行者も多いので、のろのろ運転となった。

イサムは、丘を見下ろす大きな庭園の近くに車を停めた。

ボタン、ボタンと車のドアを開け閉めする音がする。三人で車から出ると、あたり一面に緑の匂いがした。

イサムがそこでサングラスをはずし、伸びをした。みんなも真似をする。

「国谷さん、お疲れ様」と、ジュンが声をかける。

「さあ、これから少し、歩きますよ」と、イサムが応える。

「バーデンは昔からの保養地で、ウィーンから名士たちが来たの…ハプスブルグの皇帝とか、ベートーヴェンとか、シューベルトも…」と、マミが説明しはじめる。

「へえ、そうなんだ」と、ジュンが相槌を打つ。

「モーツァルト夫人のコンスタンツェも、よくここに身を寄せたの」「へえ…そう言えばマミが来てから、どのくらいになるんだっけ？」と、ジュンが尋ねる。

「三ヶ月だけど、それ以上に長く感じるわ」

「何も決まらないまま、押しかけるからだろう？」と、ジュンがつく。

「そんなこと、ないわ。CD審査まで通ったし……」

「その時は、何を演奏したんですか」と、イサムが尋ねた。

「チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲。やっぱりロシア系は、分かり易いのよ」と、マミが納得した表情で答える。

三人で見晴らしの良い庭園を散策する。

丘の上まで行くと、大理石の重厚なベンチがあり、そこで小休止となった。

あたり一面に花が咲いている。スイセンやクロッカスの黄色や紫が、とても鮮やか。

「良いね……」と言いながら、ジュンが深呼吸。

「ベートーヴェンは、この辺で、第九番や莊嚴ミサを創作したらしいのよ」

三人は森林浴をしながら、ゆっくり下りてきた。

しばらくすると、道の向こう側に「Die Inspirati
on」（インスピレーション）と書いたレストラン。

「入りましようか？」とイサムが尋ねる。

「いいですよ」とジユンが答え、マミもうなずく。

そこには、芝生のきれいな庭があった。夏場には外で食べられるよ
うに、白いテーブルがいくつか並んでいる。

「まだ少し、寒すぎますね」とつぶやきながら、イサムが扉を開い
て二人を招き入れた。

「グリユス・ゴット」と、ジユンがウェイターに挨拶する。

「グリユス・ゴット」と、若く背の高い金髪のウェイターが振り向
いて答える。

三人は、庭の見えるテーブルについた。白と赤のチェックのテーブ
ルクロスが鮮やか。

「何にしようかな」とつぶやきながら、ジユンがドイツ語ばかりの
メニューを見て苦笑する。

「ウィーナー・シュニツェルなら、多分はずれはないわよ。仔牛
のカツレツなの」とマミがアドバイスする。

「じゃあ、そうしようか」

「私は、魚にする」と、彼女が言った。

イサムも、川カマスを注文することにした。

津軽兄弟は、白ワインを飲みながらおしゃべりに耽る。運転手役の
イサムは、りんごジュースのソーダ割り。

「このこのワイン、悪くないでしょう？」と、イサムがくやしそうな
顔で言う。

「そうですね、フルーティーだし」とジユンが答えた。

「土地の人はソーダで割るんです、シャンパンのような感覚で……
最近、日本にも輸出しているんです」と、イサムが解説。

「ところでハプスブルグ家の紋章は、何故、双頭のワシなんですか」
とジユンが尋ねる。

「ちょっとキングギドラみたいですが、もともと鷹の城の城主で…

…」と、イサムがいつもの説明を始める。

「そう言えばロシアのロマノフ王朝も、双頭のワシよね」と、マミが口を挟む。

「王様の仕事は単純じゃなかったんですよ、きつと」と、イサムがちよつと苦しそつに答える。

「頭がいつぱいで、二重人格だったとか？」と、ジュンがいたずらっぽくつぶやく。

「多民族国家オーストリア・ハンガリーを治めるには、複眼的な発想が必要で……」と、イサムが調子を合わせてみる。

するとマミが、ガイドブックの中から答えを見つけてしまった。

「もともとワシはローマ帝国の紋章で、これを引き継いだビザンツ帝国が、ボスポラス海峡のヨーロッパ側とアジア側を表すため、頭を二つにしてみました。それがオーストリアやロシアで取り入れられた、らしいの」

「なるほど……国谷さんは、ワイン以外では、どんな取引するの？」と言って、ジュンが話題を変えてみる。

「チーズとか、ハンガリーのサラミやフォアグラ、面白いところではイランのサフランがありますね」

「イランでサフランがとれるの？」と、マミが反応。
「質が良くて、しかも安いんです」と、イサムが説明する。

ジュンは、パン粉に覆われた仔牛のカツレツを満足げに見やると、そこに大ぶりの檸檬を絞った。

「ほとんど、大判金貨だね」

「昔、ミラノから凱旋した将軍が、このカツレツのレシピを伝えたらしいの」と、マミが得意そつに言う。

昼食が終わると二人はジュンを連れ、グランドホテル・ザウアーホフの温水プールを訪れた。

なんと遠足を主張したマミに限って、体に合う水着が借りられないと騒ぐので、男二人でロッカー・ルームに。

黒っぽい水着に着替えてプールを目指すと、高い天井が弧を描く、白い内装の建物だった。

立ち込める湯気と、人を誘うように揺れる青い水が、なんとも懐かしい。

ほのかに、硫黄のにおいまでする。

「これは、いい！」と、ジユンが満足そうに漏らす。

大きな窓から採光しており、緑の芝生が清々しい。

母親に連れられた子供が、何人か嬉しそうにはしゃぎ、その声が大きく響く。

「ママは、随分と世話になっているんでしょうね」と、ジユンが温かい水の中で語りかける。

「いや、とんでもないです。私こそ……あとで、カジノをのぞいて見ましようか？」と、ばつが悪そうにイサムが答える。

7・オーディション

そして六月になった。

その日は朝からとても暑く、およそクラシック音楽には似つかわしくないような雰囲気。太陽が容赦なく照りつけ、地球の温暖化に警笛を鳴らしている連中の言い分も、良く分かるような日だった。

イサムは午前中、休みを取って彼女とペーター教会の前で待ち合わせた。

「やあ、元気？」と、彼は、待ち合わせ時間より二、三分遅れてきた彼女に声をかけた。

「そうね……」

彼女は、珍しくグレーのスーツを着ていた。ジャケットに、ひざまでのスカート。そして表情は硬く、ほとんど青ざめている。ヴァイオリンを小脇に抱えながら、体中のテンションを一生懸命抑えている風情。

「どう？ ゆうべ眠れた？」

「それなりにね……」と、彼女が気のなさそうに答える。

「今、緊張するのは分かるけれど、本番ではリラックスしてね」

タクシーの中でも彼女は、静かだった。

「実は私、変な事件に巻き込まれる気がするの」と、突然彼女がつぶやいた。

「なぜ？」

「第六感よ」

「俺の場合、テンションが上がると、三回続けてあくびをするんだ、おまじないのように。すると、必ずリラックスできる」と、彼が不安げな彼女をなだめようとする。

目的地を見つけたのだろうか。タクシーが間もなくスピードを落としはじめる。

アウガルテン宮殿の黄色く、背の低い建物が見えてくる。いわゆるマリア・テレジア・イエローで、屋根が茶色っぽい。

二人は白く大きな門の前で、車から降りた。

「それじゃあ、この辺で待つから、グッドラック」と、彼が声をかけた。

「うん」

彼女はヴァイオリンを小脇に抱えながら、足早に宮殿の入り口に向かって歩いていく。そして、黄色い建物の中へ。

イサムは背の高い、格子状のフェンスの外に留まる。

彼がまわりを見渡すと、同じオーデイションに向かう若い学生風の人たちが、次々と到着し、建物に入っていく。

女性もいれば、男性もいる。みな、ヴァイオリンを携えている。その表情は、総じて硬い。

マミは、順番が若かった。確か、四番目。

彼は今後の展開を想像し、段々と病院で子供の生まれるのを待つ父親のような心境になっていく。

「飯にうまく行かなかったら、マミは、日本に帰るのだろうか？

その際は、引き止めるべきだろうか？ もう少しここに留まって頑張れ、別のオーケストラを狙えとか言って？ あるいは、ザルツブルグで？ 大体、彼女が失敗したら、俺も責任を感じるかも知れない、勉強の妨げだったかも知れないし……でも、シューベルトの楽譜を買ってあげたのは、俺だよな……」

周りにも同じように、オーデイションを受けている息子や娘、兄弟や姉妹、あるいは恋人を待っている人達がいて、なすすべもなく、みな路上で行儀悪くタバコをすったりして気を紛らせていた。

それぞれに、疑心暗鬼に違いない。

それから三十分も経っただろうか。

すぐそばで、南アジア系と見られる黒髪の中年男性が、恐らく

はお嬢さんの出てくるのを待ちわびていた。

そこでついに、イサムから声をかけることにした。

「暑いですね、今日は」

「そう、そう。でも、私の故郷は、南インドだからね」

「なるほど。気候風土が、違うんだ。あつちは、ヒンズー教ですよね？」と、イサムがついつい、ぶしつけに聞いてしまう。

「そう」

「教会って、あるんですか？」

「あるある、寺院が。多神教の方が良いね、寛容で」と、そのインド人が話に乗ってくる。

「そうですねえ……何故？」と反応するイサムは、説得されない風情。

「ヒンズー教の神様って、たくさんいるだろう？ 中には、若やいだ男女もいる。すると一神教の場合と違って、リビドーを理解してくれるんだ」

「リビドーを？」

「分かるだろう？ 神様自身が、同じ問題を抱えているからだよ」

「カトリックも、結構、多神教っぽいと思いませんか」と、イサムが答える。

「そうだなあ……」

誰かが声をあげたので、宮殿の方を振り返ると、南アジア風の黒髪の女性が、ヴァイオリンを抱えて玄関から出てきた。

すると、話し相手の顔が、突然明るくなった。

「なるほど、彼のお嬢さんか」と思いながら、イサムも少しほっとする。

女性が鉄格子のフェンスの所まで来ると、インド人が駆け寄って彼女の肩を抱く。

「良く頑張ったね！」と、慰労する声が聞こえてくる。

「やれやれ、ようやく……」。

五月雨式に、三、四人のヴァイオリニストが出て来た後、マミ

が試験会場の建物から現れた。

「やっと！」

彼女は少し、うなだれているのだろうか。

イサムは鉄格子のフェンスにもたれたまま待つが、彼女が近づくにつれ、彼の心臓が強く打ち始める。

そして彼女が近くまで来ると、「マミ！」と、声をかけた。

「うん……」とつぶやきながら、マミが顔をあげる。

「お疲れ様。どうだった？」

「……分らないけど、多分、大きなミスはなかったわ」と彼女が少し、力の抜けたような声で答える。

「なら、良かったじゃない！」と言って、イサムは、ほっと胸をなでおろす。

取り敢えずは、セーフだろうか……。

帰りのタクシーの中で彼女は少しずつ、試験の様子を語ってくれた。

「最初に全員を集めた説明があったけど、それがやたらに長くて、とても暑かったわ。当然のことながら、クーラーがなくて……そうこうするうちに、アメリカ人の審査員が遅れて来たの……九月十一日、九月十一日、とかつぶやきながら、顔面蒼白で入ってきたわ。もう、ほとんど、倒錯の世界！」

「へえ……マミの順番は、そのままだったの？」

「ううん、実は番狂わせがあったの。飛び入りの女性がどういう訳か、割り込んで……」

「やっぱり！ そう言うのって、頭に来るよなあ……それで、本番は？」

「もう、コチコチ。暑いのに、弓を握る手がカジカミ状態で……」

「とにかく、終わって良かったじゃない……」と言いながら、彼はマミを抱き寄せ、

「きつと、受かるよ」と励ました。

しばしの沈黙。

「そう言えば九月十一日と言うと、十七世紀にオーストリアとトルコの間で一大決戦があった日だね。一六八三年にウィーンは二ヶ月も包囲され、ようやくこの日に救われる。応援に駆けつけたポーランド国王が、カーレンベルグの丘から、突撃をしかけたんだ。そして敗走したトルコ軍の残したコーヒーが流行りだし、カフエが誕生……」と、イサムはその場を救うためか、一生懸命語りはじめる。

「知ってる。有名な話……」と、彼女がつぶやく。

「ところでその暫く後、一六九七年の同じ九月十一日に、再びトルコとの間で戦いがあり、オーストリアが勝ったんだよ。今度は、オイゲン公の采配の下で……」

「へえ……良く覚えているね。因縁が深いんだ」

そこで彼女が突然低い声になり、意味ありげな口調で続けた。

「アメリカ人の言ってた九月十一日は多分、来年なの。気をつけな
いと……」

8・ミコノス島

それから一ヶ月も経っただろうか。

「イサム、イサム、来たわ、ついに！」とマミが電話口で叫んだ。

彼女が待ちこがれていた「合格」の通知がアウガルテン管弦楽団から来たのは、七月も末近くであった。

「九月末から来てくれて……」とマミが楽団からの手紙を読みながら、明るくつぶやいた。ようやく悩みから開放されたのである。

「ウィーンに早めに来た甲斐があつたね！」と言いながら、イサムもほっとした。

「やっぱり、シューベルトの隣人のイサムが、ソナチネの楽譜を手に入れてくれたのが良かったのよ……それに、オーディションの前晩、シューベルトの霊に一生懸命、お祈りしたの。どうか、助けて下さいって」

「そうしたら、さすがに靈験あらたかで……良かったね！」

イサムとマミは、打ち上げを兼ねてギリシャの島へ旅行に行くことにした。鬱屈するような内陸を逃れ、夏の太陽を浴びるために。

当日、二人はアテネまで飛び、そこから更に小さな飛行機に乗り換えて、エーゲ海のミコノス島を目指した。

さんさんと輝く八月の太陽。青空に向かって飛び立つ機体の下に広がるのは、深い色のエーゲ海。上空から見ると波は、とても静かである。

その昔、背中に翼を取り付けたダイダロスと息子のイカロスがクレタ島から飛んできたのも、この辺に違いない。イカロスが太陽に近づき、背中の蠟が溶けて海に落ちてしまったと言う悲しい伝説だ。

「それにしてもよく受かったね、あのオーディション」とイサムが

彼女に問いかける。

「若い女性に甘いのよ、きつと。それに、伴奏のピアニストが知り合いで、結構ウマが合ったの」

「古いヴァイオリンの音色も、良かったのじゃないか？」

「千九百十二年じゃあ、全然古くないわ……」

ミコノス島に着くと、何ともエキゾチックで風光明媚な島だった。ぬけるような空と海のパノラマに映える、乾ききった土と真っ白な平屋根の建物。そして砂浜。

彼らがバスでたどり着いた白いホテルは、海岸べりにあった。

屋上のルーフ・ガーデンには白いテーブルとイスが並び、藤棚のようなものが日陰をつくっていた。褐色の大きな壺に、派手な色のランが植えられている。そこでツアー・グループのミーティングが行われ、一通り説明が行われた。あとは自由行動だった。

二人の部屋は、三階にあった。部屋に入ると、冷房が良く効いているのが感動的だった。

ドアを閉めた時から旅の緊張がみるみるうちに消えていく。

広い部屋の白い壁と茶色い床、そしてラタンでできた調度品がよくマッチしている。窓を開けるとテラス越しに海が見え、波打ち際のざわめきが聞こえてくる。テラスには、白い縄でできた、ハンモックらしきものがかかっている。

彼らはボーイが行ってしまふとほっとして、早速そのままベッドに倒れ込み、抱きあった。もう人目を気にしなくいいと思うと、ウィーンを発つて以来、抑えてきた情熱がすっかり解放されてしまふ。

「カーテンをしめて」と彼女がかすれた声で言う。

二人はひと休みした後、シャワーを浴びることにした。短パンのリゾートファッションに着替えると、階下のレストランに下りてゆき、テーブルに案内してもらった。そして、慣れないギリシャ文

字で書いてあるメニューの英語の注釈を手がかりに、注文する。

土地の料理は素朴なりにも美味かった。串焼きの肉は熱々だったし、魚の料理はとにかく新鮮で、冷えた白ワインと良く合った。

トマト、キュウリ、タマネギ、オリーブの実、ナス等色とりどりで目に鮮やかなサラダとか、スイカやメロン。太陽に恵まれた南国の食べ物がとても嬉しい。スパイスと混ぜたご飯を葡萄の葉で包んだ、シソ巻きのようなものもあった。

食後には、ゆっくりと、濃いエスプレッソ・コーヒーを飲んだ。

「午後は、どうしようか」とイサムが彼女に尋ねた。

「風車を見に行かない？」

「近くから見てみようか」

昼食を終えてから、二人はフロントで色々と情報収集をすることにした。島の地図をもらい、ホテルの裏手から歩き始めた。白い建物の中に時々、赤紫色のブーゲンビリアの花が咲いており、目を楽ませてくれる。

「あ、あれだ、あれだ！」と彼女が叫んだ。

石畳のあるデコボコ道を抜けて行くと、向こうの丘の上に、四つの白く大きな風車が見えてきた。屋根は灰色。ちよつとユーモラスな出で立ちで、海から来る風を受けて回る様になっている。

息を切らせながら丘を登っていく。頂上まで登ると眺めが素晴らしい。湾が良く見え、左手の方には白い堤防が長く伸びている。漁船らしいのがたくさん停泊していた。あとは海と空の世界だ。

「写真を撮ろう」

「あそこの女の子に頼んでみたら？」

そこで、二人連れの若い女性に声をかけてみることにした。同じツアー・グループだったかも知れない。金髪の小柄な子がシャッターを押す役目を引き受けてくれた。

マミはその辺のお土産物屋さんで、はでな黄色いビキニを見つけて、買うことにした。

二人はそこを皮切りに、島の教会をいくつか訪れてみた。いず

れも外装は白いが、ドームの屋根の色が少しずつ違っていった。中に入るとフレスコ画が施されている。

二人は強い陽射しを意識しながらホテルに戻ると、いわゆるシエスタをとることにした。

その晩は、タヴェルナと呼ばれる居酒屋を訪れてみた。

映画「その男ゾルバ」に出てきそうな逞しい男達が肩を組み、強いビートに合わせる勇壮な踊りを披露していた。周りで見んな、皿を床に叩きつけて粉々に割り、はやしたてる。

二人は、島の解放してくれる雰囲気になり、延々と真夜中まで呑み歩く。

次の日、二人は朝食もろくろく食べぬまま、やたらと早い時間にホテルのロビーに下りていった。デロス島を訪れる同じグループ・ツアーの参加者が他にもいて送迎バスを待っていた。

「ああ、眠い」とイサムがぼやいた。

「あとで眠れるわよ」と言ってみてマミが彼を慰めようとする。

マイクロバスが到着した。

添乗員は鷲鼻の目立つ、なかなかハンサムで長身、体格の良い白髪の老人だった。早朝からサングラスをかけている。捲り上げたシャツから現れた腕は隆々としてたくましいが、とても色が白く、青白いくらいだ。

彼がマイクロバスの中でマイクを握った。背の高い人特有の、深く低い声が響く。

「私が今日、みなさんをデロス島に御案内いたします、政府公認ガイドのスピロスです。八十六歳で、このかた三十年ほど、ガイド稼業です。色がとても白いせいか、島では『幽霊スピロス』と言われますが、このように皆様を御案内する光栄に預かっており、決して幽霊では、ありません……どうぞ、よろしく願います」

「八十六歳でバスガイド、信じられない！」とイサムが思わず声を

漏らす。

「そこまでお年には、見えないけどね」とマミが言う。

スピロス氏の説明によれば、デロス島は今でこそ無人島だが、はるか昔の紀元前五世紀には結構な勢いで繁栄していたらしい。

「紀元前四百七十七年にアテネをはじめとするギリシヤの都市国家は、これから訪れるデロス島で会議を開き、ペルシヤに備えて『デロス同盟』を結成しました。アテネは、その盟主となり、覇権を握るのです。」

その後、アテネとスパルタの間でライヴアル争いが激しくなり、ペロポネス戦争が起きました。ところで、この戦争をやめさせようとした女性達のお話、御存知ですか」と、彼が低く深い声で問いかけた。

「リストラタでしょう？」と眼鏡をかけたイギリス人らしい女性が答える。

「そのとおり。『リストラタ』はアリストファネスが書いた喜劇ですね。それでは、主人公の女性たちは、どうやって男たちに戦争をやめさせたのでしょうか？」

「みんな御主人達と寝るのを拒否したんでしょう？」と若い背の高い男性が大きな声で答えた。

「その通りです」とスピロス老人が目を輝かせながら言う。そして、「あなただったら、戦争をやめますか？」とたたみかける。

「耐えられず、真つ先にやめる」とその男性が答える。

バスの中は笑いの渦となった。

「知っている、そんな話？」と言って、マミがイサムをこづいた。

「多分、日本語のタイトルが違うんだよ。『女の平和』だったかな……」と彼が少し嫌そうに答えた。

アポロンやアルテミスの神々が生まれたとされるデロス島は、ミコノスのすぐ西にある、小さな島であった。

やや大型のモーターボートから降りて上陸すると、笹のように

細長い葉をつけたオリブの木が点々とあり、風情のある古代遺跡がそこかしこに残されている。

太陽がさんと照りつけ、痛いほどである。

かつてアポロン神殿のあった場所まで行ってみると、手前の参道に大理石のライオンが衛兵のように並んでいて、今はなき神殿を忠実に護っていた。すっかり風化しているため、ライオンたちの雰囲気はむしろユーモラスだ。

古代の住居跡も所々にあり、訪ねてみると鮮やかなモザイクの床が歓迎してくれた。中でも印象的なのは、アポロンを象徴する、錨にまわりつくイルカだった。

「すごいね、こんなのが未だ残っているなんて。それにしても、きれい」と言いながらママは、しきりにシャッターを押す。

「こういうのが、西洋美術の源流にあるんですよ」と、ガイドのスピロスさんが、屈みながらにこやかに教えてくれた。

「とつても素敵。日本人にはないような感性があるわ」

「どこの国でも、感性の鋭いアーティストはいる。みんな、心の葛藤を持つ人たちなのです。心の葛藤って、わかりますか？」

「ええ……多少」

「意識と潜在意識って、言いますよね。その対立と葛藤なのです。そこから創造力が生まれるのです。貴女にも、心の葛藤がありませんか？」

「私の場合は、音楽性の問題、かな」と、ママがつぶやいた。

「貴女は、音楽家ですか？」

「そうですね、一応」

「実は、そんな気がしました。耳がとても良いのでしょね。楽器を演奏するのですか？」

「私、ヴァイオリニストです」

そこで彼は、鷲鼻の上からサングラスをとった。八十六歳という年齢にしては、なかなかハンサム。左目がどうやら、義眼のようだ。「へえ……それは偶然ですね……ヴァイオリンは、私の一番好きな楽

器なのです」と言って彼は右目でウィンクした。そして、

「日本の方ですか？」と更に尋ねてきた。

「ええ、でもウィーンで勉強しているのです」と、彼女がためらいがちに答える。

「貴女のボーイフレンドも、ウィーンから来ているのですか？」

「そうです」

「幸せそうですね……そして貴方は、とてもチャームिंगだ……」

イサムが近づくの察知し、彼はサングラスをかけながら、こつこつやいた。

「私は、戦争で精神に異常をきたし、ほっとした途端に動物的な潜在意識が表に出てしまう人をたくさん見えています。この世の地獄です。良く覚えておいて下さい」

そして、イサムを見ながら続けた。

「音楽は良い。潜在意識さえもなだめ、癒すことのできる、普遍的な薬です」

「楽器を演奏すると、アルファー波が出るんですって」と、マミがフオーする。

「特に歌を歌うと、潜在意識も解放されるんだ」とスピロス老人が、まるで独り言のようにつぶやいた。

日差しが強く、風も強い。そこで丹念に日焼け止めを塗り、真面目に日陰を探してしまう。

そこで昼食となった。クーラーボックスからサンドイッチが配られる。トマト、キュウリ、そしてチーズが挟んである。それをコラーで流し込む。

「ねえ、スピロスさんって、不思議な人だと思わない？」とマミがイサムに問いかけた。

「確かに……でも、戦争体験が厳しかったみたいだね」

「それだけじゃあ、ないの。彼、体があんなに大きいのに、陽の光

で出来るはずの影が、いくら探しても見つからないの」と彼女がえたいの知れないことを言い始める。

「それはどうかなあ……太陽が真上から射しているせいじゃないか？」

「左目がリアルでなく、義眼なの」

「へえ……だとしたら？」

「幽霊スピロスって言うあだ名、当たっているんじゃない？」

「そんなの、根も葉もない噂だよ」と、彼が断言するように言う。

「色白なせいとか、骨まで透けてみえるような気がするし……」と言う彼女は、少し気色悪そうであった。

夕方、ミコノス島に帰ってくると皆、少しほっとした。早くも、住めば都だ。

その後の二日間、都市文明とは、おさらばだった。

日光浴、海水浴、シエスタ、酒宴、そして官能的な高揚感と陶醉。これが二人の日課となった。久しぶりの開放感が、ありがたいことに青春の喜びとエネルギーをとり戻してくれた。

島を離れる前の日の午後、二人は海岸に近いホテルのプールにいた。マミは泳げるように、長い髪の毛をアップにしている。

「さつき、デロス島で一緒だったイギリス人のカップルが話していたけれど、ガイドの『幽霊スピロス』は土地の有名人で、八十六歳という触れ込みだけど、実は、第二次世界大戦で亡くなった兵士の幽霊だと言う噂らしい」とイサムが小声でマミに言う。

「やっぱりそうなのね。兵隊と言われれば、どことなく……」

「いまだに、筋骨隆々としているし……」

「さあ、また泳いで来よう。音楽家ができるスポーツって、限られているのよね」と、あわててサンダルを脱ぎながら彼女が言った。

マミが黄色いビキニで泳ぎはじめる。イサムはデッキチェアに寝そべりながら、プールサイドで日光浴する若い女性を眺めていた。

彼女らは、この時とばかり水着のトップをはずしていた。さすがにマミは、ヌーデイズムで有名なこの島でも慎ましやかにしていたが、ちよつと残念でもある。

「自意識過剰になるよな。マミも似たようなことを考えるに違いない」と、うつらうつら考えるイサムだった。

そこに、小さな子供が遊んでいたマルチカラーのビーチボールが転がってきたので拾ってやり、投げ返す。

しばらくすると、マミがあがってきた。そしてタオルで身体を拭きはじめた。思い切り陽に焼けているので、半年はそのままだろう。

「気持ちいいわよ。イサムは泳がないの？」

「いい、もう充分堪能したから」と言いながら彼は、読んでいた本から顔を上げる。そして隣のデッキチェアにかがみこみ、彼女の腰に腕をまわす。

「邪魔だなあ、イサムは！」と彼女が、まわりを気にしながら抗議

「そろそろ、戻ろう」

「いいわよ……」

三十分もたたないうちに、二人はホテルの部屋に戻っていた。

部屋に入ると、冷房がよく効いていた。イサムはさっそくカーテンを閉めてしまう。

二人は抱き合った。

彼女は、花の香の石鹸の匂い。

一眠りして起きてみると、イサムは全く違うモードに轉換していた。

マミが眠るベッドを離れて窓際まで行き、ベランダに出るとハンモックにぎごちなく横になった。そして夕暮れの海岸を見下ろし、海風にゆられながら、考えに耽るのであった。

「この、子供が作られるシステム、相当神がかっている。ここまで

気分が良いからこそ、種の保存や繁栄に繋がるのだろう。でも、どうやって編み出されたのだろうか……イルカとか、他の動物も、こんなに強く感じるのだろうか」

暫くすると、イサムは再び彼女が欲しくなってくる。

そこでついつい、ベッドの方を見てみると、マミは既に起きあがっていた。どうやらイサムの雰囲気を感じ取っていたらしい。

「イサム、海岸の星を見に行かない？ 最後の晩なのよ」

「分かった、そうしようか」と、彼はあまり気の進まないまま答え、シャワーを浴びることにした。

そう言えば、土地のひなびた舟歌が中庭から聞こえてくるではないか。

9・南アメリカから

グワラーン、カラーン……グワラーン、カラーン！
シユテファン寺院の鐘の音が響き渡る。

ここは、ケルントナー通りに面した日系の商社「PIKACHU」のオフィスだ。九月に入り、真面目に仕事をする雰囲気になりつつあった。

「ルルルル！」とイサムの机の電話が突然鳴った。もう一度鳴る。隣の平原さんが彼の方に目をやる。

イサムがようやくパソコンから顔を上げて電話機に注意を向けた。点滅するランプは、内線らしい。

「はい」

「国谷君、ちょっと面白い話があるんだけど……」

本間支店長の声だった。日本人男性が五人と少ないので、すぐに分かるのだ。

「君は南米に行ったことあるか、南米？」

「いいえ」

「実は、出張の話が舞い込んでいてね」

「はい」

「二週間先だけど、お願いできるかな」と、支店長がやや強めにたたみかける。

「勿論、行きます」

彼は、もうすぐママがアウガルテン管弦楽団の正式メンバーになることを考えると、この時期に出張することには抵抗も感じたのだが、現地雇いの弱みも手伝い、本能的に色よい返事をしてしまったのだ。

「チリのサンチアゴだから、結構いいはずだよ」

「チリですか」とイサムは自信なさそうに返事をする。

「うん。国谷君は、札幌の出身だったよな？ 世界ワイン・オリ―

ブ協会は毎年、大きな年次総会を世界各地で開催しているのだが、我々は札幌を来年の主催地に推したいんだ。その誘致キャンペーンがサンチアゴで行われる。対立候補は、ハンブルグとケープタウンだ」と、支店長が熱っぽく説明する。

「へえ……何日間くらいですか？」とびっくりしてイサムが尋ねた。「多分、十日間くらい。帰りがけにニューヨークで、このワインの宣伝もしてきて欲しいんだ。ほら、マンハッタンに超有名な日本料理屋さんがあるだろう？」

「ノブナガですか？」
「そうだ。そこにワン・ケース、白ワインを先に送っておくから、帰りがけに現地で宣伝して欲しいんだ」

そこでイサムは、意外と面白い出張になりそうだと、この印象を得たのである。そう言えば、本間支店長が四月にパリ出張したおかげで、マミとのデートを邪魔されたけど、あの時に大体決まったに違いない。

世界ワイン・オリーブ協会はもともフランス、イタリア、スペインと言った地中海沿岸の国が中心だったが、ワインやオリーブが世界中で嗜好されるにつれ、メンバー国も大幅に増えていった。そして日本も程なくメンバーに加わったのだ。

日本ではワインやオリーブを輸入するのみならず、自ら生産している。例えば、山梨のワインや小豆島のオリーブは有名だ。

協会の本部は南フランスのエクス・アン・プロヴァンス。

今年のチリ総会でうまくいけば、来年、アジアで初の年次総会になるのだ。

そこでワインやオリーブに詳しく、体力もありそうな札幌出身者、イサムに声がかかったらしい。

彼は早速、マミに電話を入れてみた。

「出張が入ったよ。足かけ十日間くらいで、南米だ！」

「……へえ……私、南半球さえ、行ったことないわ。いつから行くの？」

「……多分、十四日頃から……帰りにニューヨークにも立ち寄りらしい」と、ためらいがちに彼が答える。

「何だ、せつかく引つ越しを手伝ってもらおうと思っていたのに……」

「そうか……悪かったな……」と言って彼が弁解しようとする。

「しょうがないわよ。行っていらっしやい、待っていてあげるから」とマミが彼を激励する。

その晩、イサムは萩谷オサムにも電話を入れた。

「札幌のために、勝ってこいよ！」と、萩谷は激励してくれた。イサムと彼とは、札幌の小学校で一緒だったのだ。

「でも気を付けろ、南半球だと調子が狂うかも知れないから……」と、何故か付け加える萩谷だった。

それにしても、南米へのフライトは長かった。フランクフルト経由で、何と十八時間以上である。

アルゼンチンの首都、ブエノス・アイレスの空港で短時間休憩すると、今度は山越えのフライトとなった。高度がどんどん上がり、そのままアンデス山脈をぐんぐん登りつめる。すると今度は、山頂すれすれに飛ぶ印象で凹凸に満ちた灰色の山肌が迫り、生きた心地がしない。

山頂を越えると突然、絶壁から飛びたつたような気分になる。まるでハング・グライダーで山頂から離陸し、宙に浮いた瞬間のようだ。

この劇的な山越えを終えてしばらくすると、遠くに入り江らしきものが見えた。

太平洋だ！

その後、少し内陸方向に戻り、サンチアゴに着陸する。

飛行機の外に出ると空気がとても清々しい。万年雪をいただい

たアンデス山脈が遠くに見える。

昨日まで秋だったのに、ここは春めいている。人々の表情も、明るい。

イサムは空港で世界ワイン・オリーブ協会のブースを見つけると、そこでワインのボトルとオリーブの実をあしらった、黄色いTシャツをもらう。年次総会の関係者や各国の仲間が、既にこのシャツを着て歩いている。

ホテルに向かうシャトル・バスに乗りこむ。

窓から見える柳の新緑が、寝不足の目にしみる。

サンチアゴは広々として開放感があり、ヨーロッパにいるような落ち着きも感じられる都だった。

イサムはホテルにチェックインすると、日本の仲間に挨拶するため三階の大会議室に下りていった。

そこでは若いチリ人らしき女性が電話に向かって話していた。

「Si, si, el japonés está serio, aiora……」(そうそう、その日本人、結構真面目で)

どうやらホテルの関係者で、日本から来たお客さんの要望について相談しているらしい。

「Mirra, estoy ocupado esta noche e……」(ねえ、私、今夜は忙しいの)

「何だ、私用電話になってきている」と誰かが声をあげる。声の主はチヨビ髭の中年男性だった。

よく見ると、札幌の拓陽高校時代の先輩、盛田さんではないか！

「あ、盛田さん！ お久しぶりです」と思わず声をかける。

「なんだ、国谷君か……お久しぶり！」と彼はイサムの肩をたたき、握手を求める。

「スペイン語、分かるんですか？」

「多少ね、商売がら……」と盛田さんが少しびっくりした表情でイサムを見つめた。

盛田さんは、イサムの勤めている商社「ピカ忠」の東京本社から来ていた。思い起こせば、イサムがウィーンの「PIKACHU」で働くようになった背景には、彼の口添えがあったのである。

「それにしても久しぶりだね。それ、君のパソコン？」と言う盛田さんの指は、イサムの抱えている黒い布地風のケースを指していた。「ええ、ウィーンから手荷物で……それにしても長いフライトでしたね」とイサムが答える。

「御苦労様。東京からも長かったよ……」

「随分立派なヒゲですね」と言っただけでイサムが少し表情を崩し、にっこりした。

「そう。おい、札幌のために頑張ろうな！」と先輩が答える。

そこでイサムは、今回の出張が実は、盛田さんの手引きかと感じたのである。

「国谷君、蜂須賀支店長に挨拶した？」と盛田さんが聞いてくる。

「いいえ……まだです」

「ほら、あそこのソファに……彼は、旭川出身でワイン業界のボスだったんだよね……」と言いながら、盛田さんが、部屋の反対側を示した。

支店長は背が高く、スリムでちょっと粋な感じの紳士だった。

「国谷です。今、ウィーンから到着しました」

「やあ、蜂須賀です。御苦労様、遠いところ」と、よく響く深い声で彼が答える。

「今回参加できて、光栄です。宜しくお願ひします」と言いながら、イサムが名刺を渡した。

「このキャンペーン、頑張っただけ。ついでに少しサンチアゴも見ていってくれ、な……」と言いながら、支店長はその名刺をしげと眺める。

「はい」

「よろしく」と言っただけで蜂須賀さんは、上着の内ポケットから名刺を出し、イサムに一枚くれた。

翌日は月曜日で、会議の初日だった。

朝とても早く、盛田先輩から電話があり、

「国谷、朝食と一緒に食べないか」と誘われたので、彼はあわてて空港でもらった黄色いＴシャツとジーパンに着替えた。

先輩の部屋は意外と広く、事実上小さなスイート・ルームになっていた。

「おはようございます」

「お久しぶり、ご苦労様」

先輩も、同じ黄色いＴシャツ姿だった。二人ともずんぐりむっくりと体型が似ていたが、これは札幌の拓陽高校時代、一緒に空手をやっていたせいだろう。

「その髭、なかなか貫禄ですな」

「いや、上海時代からだね……」

二人でルーム・サービスの朝食をとりながら、話し込む。卵やらオレンジやらで、とても豪華である。

「先輩は、大学でも空手部でしたっけ？」と言いながらイサムがオレンジ・ジュースを二人のグラスに注ぐ。

「そう。君は確か、高校の時にやめたんだっけ？」と盛田さんが顔を上げて昔の話を持ち出す。

「ええ、残念ながら、大事なところにケリが入っちゃって……その後はオケに戻ったんです」

「しょうがないよな、清水さんも手元、いや足元が狂っちゃって……それにしても、格闘技やったあとでオケね……でも、その縁でウィーンにいるんだよな……」

「そうなんですよ。その節はお世話になっちゃいまして」と、イサムがへりくだる。

「どう、あそこの事務所？」と、彼がイサムの職場のことを尋ねてきた。

「なかなか落ち着いていて、いいですよ」

「……ところで、結婚した？」と、先輩が肝心なところをついてきた。

「いや、未だに独身です」

「じゃあ、一応、俺と同じだ。ワツハツハツ！ 別に、あのケリが原因で結婚できない訳でも、ないんだろう？」

「いいえ、まさか、そんな……」と、イサムが困ったような顔で答える。

「ウィーンでは、どう？」

「舞踏会くらいですかね、セクシーなのは。昔、風紀上の問題がとやかく言われた理由が、良く分かります。特にワルツなんか、密着型だし……でも、自分が踊らないと全然刺激が足りなくて……」と、イサムが答える。

「東京時代の彼女なんか、どうしているの？ 寂しがっていやしい？」と盛田さんが、コーヒーのおかわりをイサムに注ぎながらしつこく聞いてくる。

「いやあ、自分がウィーンに逃げたものですから、何となくその後……」

「藤江さんだったよね？ 確か、今、ニューヨークにいるはずだよ」と盛田さんが核心に迫ってくる。

「ああ、そうでしたか」と言いながらイサムは、彼女のことを思い出そうとする。

彼は札幌から東京の大学に進学すると、フルート奏者としてオーケストラに入団したが、三年の時、横浜の大学にいた藤江良子が入団し、互いに知り合うように。イサムはフルートのセカンド、彼女は第二ヴァイオリンだった。

「彼女は確か、日系の大手銀行にいるはずだよ」

「……へえ……」とつぶやきながら、イサムがいぶかしげな顔をする。

「君は帰りに立ち寄るんだよね、ニューヨーク？ 連絡とってみたらっ」

「ええ、そうでしょうけど……」と言いながら、イサムは徐々に警戒心を働かせはじめた。

「彼女のメルアド、持っている？」

「いいえ」とイサムは、投げやりな態度で答えた。

「彼女の勤め先から多分、割り出せるよ。同じ創業銀行の人の名刺、確か持っていたから、名前の部分を入れ替えて……あとで教えてあげる」と、盛田さんが続けた。

「そうですか。それでは宜しく」と、イサムは調子を合わせてしまった。

十時頃、彼らは蜂須賀支店長と一緒に、隣のホテルにいた世界ワイン・オリーブ協会のチャンドラさんを訪問した。そこで支店長が、誘致キャンペーンを展開したのである。

「日本ではワインは勿論のこと、オリーブも栽培しています。特に日本の女性が地中海の料理やお酒を好むのです。来年の年次総会は是非とも札幌に主催させて下さい。世界ワイン・オリーブ協会の年次総会がアジアで開催されれば、宣伝効果は絶大です。ワインやオリーブの売れ行きにも大変良い刺激に違いないのです」

ところがチャンドラさんは、意外にも冷たかった。

「皆さんが一生懸命なのは分かりますが、他にも候補地がありますよねえ……例えばケープタウンが勝てば、アフリカで初めて開催される年次総会にもなるわけです。他の候補地の関係者とも、よく相談して下さい。これから結構大変ですよ。幸運を祈ります。では、そろそろ会議場に出かけますので」と、彼は忙しそうにみんなを追い払った。

その夜、団員は支店長の案内で、土地で評判の海鮮レストランに出かけた。そこで生牡蠣、スモークサーモン、蟹や生ウニを肴に、土地のワインを賞味したのだ。

みんな、久しぶりの解放感に浸って喜んだ。

蜂須賀支店長が立ちあがって、スピーチを始める。

「投票になったら、おそらく札幌だろう。みんな、対立候補が撤退するくらい強力なキャンペーンを張って欲しい。ケープタウンはやはり南半球だから、サンチアゴの次の年だと、勝ち目はないだろう。問題はハンブルグだが、最近ヨーロッパで開催している。だから、アジアで初めてだとアピールすれば、十分勝ち目があるはずだ。覚えておいて欲しい……結局、良く考える者が勝つのです。

Who thinks, wins!

それでは、我々の来る勝利を祝して、乾杯！」

「乾杯、乾杯！」と、みんなが地元の赤ワインの杯を上げ、唱和する。

しかしながら、支店長が会場から退出した途端に、周りの連中は懐疑的なことを漏らし始めた。

「『Who drinks, wins.』の間違いじゃないの？」

「ワツハツハツ！」

「支店長には、立場があるからなあ……」

「ヨーロッパでは、確かに最近ルクセンブルグが主催したけど、来年アフリカでやったとしても初めてだ」

「そうすると、札幌のメリットって、何だろうか？」

「涼しいことだろうなあ……」

「ちょっと苦しい戦いになるかもしれない。南アフリカのワインは知名度高いし……」

そして気がついてみると、夜中の十二時近くになっていた。

みんな、タクシーに分乗してホテルを目指す。盛田さんとイサムは同じタクシーだった。そこで彼は、イサムに小さな紙切れを渡してくれたのだ。

「ryoko.fujie@sohgyo.com」と書いてある。

「今朝の宿題だよ。多分、これで彼女と連絡がとれるはずだから……」

…」と盛田さんが低い声で言う。
「どうも、わざわざ」と答えるイサムは、当惑していた。
昔から先輩は、拓陽高校OBの中でも面倒見が良すぎて、困ることもあったのだ。

それでもイサムは、ホテルの部屋に戻ると、酔った勢いでニューヨーク宛てにメールを書いてしまった。

「藤江良子ちゃんへ。元気になっている？ 国谷イサムです。NYに移ったとは知らなかったけど、すごいね。ぼくはあの後、ウィーンに移ったけど、今ちょうど南米のチリに出張中です。帰りがけにNYに立ち寄るけれど、久しぶりに会いませんか……」と、そのメールは、かなり長いものとなってしまった。
そして彼は、ついに「送信」をクリックしてしまう。

ついに金曜日が来てしまった。

朝、国際会議場で決戦投票が行われた。

ハンブルグが形勢不利と見たためか、レースから脱落したので、札幌とケープタウンの一騎打ち。

あにはからんや、勝ったのはケープタウンだった。何と、たったの十三票の差だった。

「おかしい！ 南半球が二回続くのは、変だよな……」と、さすがの蜂須賀支店長も肩を落とし、愕然としていた。

勝ったケープタウンの関係者がひな壇で世界ワイン・オリーブ協会の幹部と熱のこもった握手をしている。チャンドラさんの姿も見える。たくさんのカメラマンがフラッシュをたいており、それがとてもまぶしい。

ケープタウンでは「世界ワイン・オリーブ協会の年次総会、初めてアフリカに」との見出しで朝刊に載るのだろう。

南アフリカの連中はみな肩をたたきあい、喜びに浸っている。

「十三票か……札幌を応援してくれた皆さんに申し訳ない」と蜂須

賀さんがうつむきがちに言った。

「しょうがないですよ。あそのワインは、知名度高いし……」と、誰かが彼を慰労しようとする。

「今年は本当に御苦労様。来年はケープタウンで会いましょう」と議長が最後にアナウンスして締めくくった。

イサムは周りのうなだれている連中をよそに、早めに自分の部屋に戻り、ジャケットと会議用の黄色いティー・シャツをかなぐり捨てるように脱ぐと、久しぶりにインターネットにアクセスして自分のメールボックスをのぞいて見た。

驚いたことに、藤江良子から、メール！

「信じられない！」と、思わず口走ってしまった。

「国谷君、お元気そうですね。メールをいただくなんて、もう、びっくり。ニューヨークに来られるのなら是非お会いしたいわ。ホテルに着いたら家に電話を下さい。藤江良子」

この前向きなメッセージに、彼は舞い上がってしまった。

その晩、サンチアゴの空港でイサムは、どっと疲れが出てしまった。盛田先輩は、東京便で既に飛び立っている。敗戦は、どんな理由があっても、やはりめげるのである。

彼の搭乗したニューヨーク便が飛び立ち、シートベルト着用のサインが、あの特徴的なソフトな音と共に消えた。

やれやれ……再び長いフライトだが、疲労感が睡眠を誘うので、楽だ。

10・自由の女神

イサムがチリで苦勞していた頃、マミはアウガルテン管弦樂團に入団するのを控え、一区からの引越しだった。

ヴァイオリンの音が大きいとの噂が流れ、プロの樂團に入る前に、気兼ねなく練習できる所を捜したのである。

転居先は、ウィーンの中心部から離れた丘陵地帯にあるグリントング地区にあった。そこは「ウィーンの森」の始まる田園地帯であり、葡萄畑や「ホイリゲ」と呼ばれるパステル・カラーでメルヘン調の、何とも可愛い造り酒屋さんのたくさんあるエリアだ。

この辺にはその昔、ベートーヴェンが住んでいたことがある。

彼はその家で、難聴を苦に「ハイリゲンシュタットの遺書」を記している。その直後に亡くなったわけではなく、大変なハンディを負いながら、次々と名曲を創ったのである。

イサムがいないのでマミは結局、キャロルと萩谷に引越しの手伝いをお願いすることにしていた。

マミの持ち物の中で一番かさばるのは、アンプライト・ピアノ、そして大きな植木だった。これらはさすがに後回しにされたが、それ以外は大型タクシーの往復二回ほどで済んだのである。ヴァイオリンだけは、マミがまるでハンドバッグのように、肌身離さず大切そうに持っていた。

新居は地上階にあった。開けたままの窓から小さな庭が見える。周りの木々はすっかり紅葉し、黄色や赤に染まった葉っぱが風に吹かれている。

都心部から来ると、小鳥のさえずりが新鮮である。カチ、カチ、と時々聞こえるのはドングリの落ちてくる音だろうか。

マミが慣れないガスコンロでお湯を沸かしはじめる。

「ここ、住み心地良さそうじゃない？」と、キャロルが食堂兼応接間で伸びをしながら言う。

「ああ、しんどかった。みんな、疲れたでしょう？ でも、助かったわ」

「いいえ、いいえ。お互い様だよ」と萩谷が答える。

そこでキャロルと萩谷はマミを囲み、開放感にひたりながらコーヒーを飲み、談笑したのである。

窓の外が、だんだんとうす暗くなっていく。

「マミ、アウガルテン管弦楽団に入るのは、いつから？」と、キャロルが問いかけたので、マミは、はっと我に帰った。

.....

国谷イサムは、チリからの長いフライトに飽き飽きしていたので、ニューヨークに着くと、ほっとして搭乗機を後にした。

藤江良子に会えるのだろうか……。

空港の建物を出てタクシーを捜すと、空気がひんやり。

そう言えばここは北半球で、再び秋なのだ。

タクシーでマンハッタン島のホテルに乗り付けた。チェックインして荷物をエレベーターに載せ、五階までのぼっていく。

部屋に入るなり、思わずカーテンを開けてみる。下に大通りが見えるが、土曜日で時間が早いせい、車の流れはまばらで、そこまで耳障りでない。

ほっとしてベッドに倒れこむ。季節が元に戻ったところで、どつと疲れが出てしまう。

チリの誘致合戦は、春の陽気にも支えられ、熱気を帯びていたのだ。

一息ついたところでイサムは、大通りを行き交うイエロー・キヤブや観光客を見下ろしながら、彼女に電話を入れてみた。

「Yes, hello?」と、懐かしい声が、こなれた英語で電話に出た。

「藤江さん？」

「あ、国谷君、着いたのね！」

彼女はまるで、昨日別れたばかりのような調子。

「そう。お久しぶり！」

「元気？ フライト、長かったでしょう？」

「まあね」

「これから、そっちに行くわ」

三〇分くらい後にロビーに降りていくと、藤江良子は、既に到着していた。

中肉、中背の女性で、髪はショートカット。やや肉付きがいい。年は、イサムと同じに見える。

「あ、国谷君、お久しぶり！」と言いながら彼女が右手を差し出した。

「やあ」

握手をする。イサムもホツとした表情で、にこやかだ。

「随分、大人っぽくなったね」と、彼が言う。

「もう、いいおばさんよ」と答えながらも、彼女はさすがに嬉しうだった。

「いいや、そんなことない」と言って、イサムが彼女の瞳を見つめる。

「有り難う。チリで、大変だったんでしょ？」と、彼女が同情に満ちた目で尋ねる。

「まあ、天気も良かったし、メシも悪くなかったよ」と、彼がカラ元気を出しながら答えた。

「何か、誘致合戦があったんですって？」

「そう、ちよつと思つうように行かなくて……」と言う彼の声は、次第に小さくなっていく。

「疲れたでしょう？ ま、アメリカ大統領選と比べれば、何でもないわよね」

「そう言えば、十一月にあるんだっけ？」

「そう。ブツシュ候補が勢いに乗っていて……」と、彼女が眼を輝かせながら答える。

「彼って、共和党？」

「そう、お父さんと同じよ。国谷君は、ニューヨークでも仕事あるの？」と、彼女が問いかける。

「そう、月曜日には白ワインを……」

「Well, what a pleasant surprise anyway! 良かったわ、この週末がちょうど空いていて私たちが会つのは、何年ぶり？」

「三年くらいかな……」

「その後も、フルート続けている？」

「ウィーンだと結構役に立つものさ。でも所詮、仕事しながらだからね……」と言つイサムは、弁解気味だった。

「音楽をやるなら、ウィーンも手かも知れないね。でも、クラシックばかりでしょう？ ジャズも良いわよ」

「そう言えばライブ・ハウスにも行きたいね」と、彼が答える。

「今日は、どこに行こうか。自由の女神、近くで見たことある？」

「島まで行ったことは、ないよ」と答える彼は、今やただの観光客でしかなかった。

「ちようど、いいかもね……行ってみようか？」

二人は、マンハッタン島最南端のバッテリー・パークまでタクシーで行くことにした。

到着すると、公園の芝生と海、空の広がりコントラストが、とても鮮やか。

そして至る所に、大統領選の派手なポスター、Tシャツやバッグが……。

あたりには、ありとあらゆる人種の観光客がいた。

波止場まで行くと、フェリーが何隻か、乗客を待ちながら停泊し

ていた。

ブラスバンドがすぐ近くで、土着系ジャズ・スタンダードを演奏し、ホリデー気分を盛り上げている。

二人は御多分に漏れず、並んで切符を買い、乗船した。

「天気良くて、ラッキーね」と言いながら、彼女が微笑みかける。「チリ出張中は、鬱屈したからなあ……」

フェリーが周りに白い水しぶきをあげながら、だんだんとマンハッタン島を離れて行く。するとニューヨークの超有名な摩天楼街の景観が、少しずつ小さくなっていく。

海風が心地良い。船の揺れは規則的で、まるで乗客を催眠術にかけようとしているかのようだ。

藤江良子が、マンハッタン島の方を指先で示しながら、説明してくれた。

「あれが、貿易センタービル。上の方にソウ銀のオフィスがあるの」

「二本、同じがあるよね」

「右側なの。下の方が、ウォール街」

彼は潮風に当たりながら、景色を呆然と見ている。

一年後にそこで、二十世紀初の大事件が起きるとは、誰が想像しただろうか。

「そうそう、南米からここまで戻って来て、まだワインの仕事があるんだっけ？」と、彼女が半信半疑で尋ねる。

「ノブナガって言うレストラン、知っている？」

「ああ、あそこは、超有名」

「白ワインを売り込むんだ。オーストリア産を」と、彼が強調する。「なるほど」

風がとても強い中を、今度は進行方向に目を向けてみると、自由の女神像が少しずつ見えてくる。

「ヨーロッパから移民が船で到着すると、まず目にしたのよ。そして、アメリカに来たんだ、って実感したの」と、彼女が感慨深げに言う。

イサムは少しずつ緊張がほぐれ、気分が回復してくるのを感じた。

「そう言えば独立記念日、『インDEPENDENS・デイ』って言う映画、見た？」

「結構、壮絶なやつでしょう？」と、彼女が答える。

「そう、異性人が地球を侵略して、エンパイア・ステート・ビルもやられてしまう……」

自由の女神像が近づいてくると、想像よりも、はるかに大きかった。

あの何とも言えない、特徴的なパステル調の青緑色が不思議なくらいに印象的だ。

「そう言えばこの色、ウィーンでもよく見かけるような気がする。宮殿の屋根とかで……」と、イサムがつぶやく。

「本当に？ これはねえ、高さが五〇メートルあるの……右手で持つトーチから燃えさかる金の炎まで……」と、彼女が得意そうに説明する。

島に到着すると、みんな次々と下船していった。

上陸すると、少しほつとする。

そこでイサムが彼女に問うてみた、「いつからニューヨークにきているの？」と。

「もう一年くらいになるけど……」

「どう？ 面白い？」

「悪くないわ、とても刺激的な町よ」と、彼女は誇らしげだ。

「ヴァイオリン、続けている？」

「いいえ。仕事しているともう、無理なの」

長蛇の列で二人は上まで登らなかつたが、下から女神像を見ているだけで、壮観だった。

「こんなの、フランスからどうやって、運んだんだろうか」と、イサムがつぶやく。

「こつちで組み立てたの、三百五十個。四ヶ月かかったんですって」と答える彼女は、イサムの疲労を感じとっていた。

「すごいね」

「自由と独立のシンボルなの」

「ウィーンは、双頭の鷲やら十字架、古い世界のシンボルで一杯で

……」

「そうよね」と、彼女が気のなさそうに返事する。

「知っている？ フロイトって、夢に出てくるもの全てを、男性や女性のシンボルに見立てたんだ」と彼は、萩谷の得意分野を想起しながら、口走った。

「へえ……アメリカ人も、フロイトだとかユングだとか、通ぶって論じるのが好きだよ……」

「意識と潜在意識って、本当にあると思う？」と、彼がナイーブそうに尋ねる。

「よく、分からない」

夕方、帰りのフェリーは強い風であおられ、結構揺れた。

船から下りる頃、イサムは少しフラついていた。

「少し顔色が悪いけど、大丈夫？」と良子が、言葉少ない彼に問いかける。

「サンチアゴで、少し疲れたんだらう」

「そうよね。少し休んでいく？」

彼は、黙ったままだ。目が少し血走っている。

「分かった、うちのアパート、近いから行きましょう。三十八階からの眺め、悪くないのよ」と言っただけはあわててタクシーを拾い、運転手に自分のアパートの住所を告げた。

「明日はゆっくりで、良いんでしょう？」

.....

「mamitsush@hotmail.com」宛てに、ニューヨークから突然メールが飛び込んだ。

「マミちゃん、

すっかり御無沙汰しているけど、最近、元気？ マミの就職先、結局どうなったんだっけ？ ウィーン？ それとも……ニューヨークでは見かけないわよね、最近。まあ、一番楽なのは、日本かも知れないわね。

いずれにせよ、貴方のメールアドレスが、まだ万国共通のままだと信じて筆をしたためる次第です。「Hotmail」って、便利よね。

私のパソコン、しばらくウィルス性の風邪をひいてしまって、誰とも連絡が取れなくなっていたの。ごめんね。

今、私はニューヨークで、創業銀行の出先に勤めているの。給料も暮らしも悪くないけど、少し世間が狭いかも知れない。

実は大学時代の彼氏に、久しぶりに会ったの。ウィーンからチリに出張してきた帰りだ……自由の女神まで案内してあげたら、そのあと思わぬ展開があつて……。

彼が疲れていたから、看護婦さんしてあげたのよ。選挙運動がうまく行かなかったみたいなの、チリで。そうしたら、いろんなことがあつて……何だか胸騒ぎがするわ。

私、何だかとっても、糸を紡ぐグレートヒエンなの。

彼の名前は国谷イサムで、ちょっとつづれたエルヴィス・プレスリーって感じ。ウィーンで日系の会社に勤めているの。確か「ピカ忠商事」って言っていたわ。マンハッタンの「ノブナガ」でオーストリア・ワインを宣伝するって言ってたから、食品が専門かしら。

貴方がウィーンの周辺に行くのなら、どこかで出くわすと思うのよ。彼は音楽もやるし、スポーツマンタイプで、とってもナイーブなの（笑）。

看護してあげたら、元気になったの。

またニューヨークに遊びに来るって、言っていたわ。

マミが、もし国谷君の噂でも聞いていたら、教えてくれる？
いずれにせよ、御近況お知らせ下さい。

舞い上がってしまった藤江良子

マミはもはや、素面ではいられなくなってしまった。

カットグラスにウィスキーをなみなみと注ぎ、一口飲む。

脳髓が刺激される。

思いが、かけめぐる。

「藤江良子とは、高校時代に同じ先生にヴァイオリンを習っていたわ……一年先輩で……イサムの知り合いだったとは！」

もう一度、グラスを口に運ぶ。

電話が鳴った。

「アロー？」

「マミ？」

「そう」

「ジュンだよ」

「お兄さん、元気？」

「そう。よく聞こえるなあ……引越し、うまく行った？」

「そうね」

「これで、気兼ねなく練習できるね」と、ジュンが強調する。

「ヴァイオリンのこと？ 多分、そう」

「国谷君、手伝ってくれた？」

「それが……」と言いかけて、マミは消え入るような声になる。

「どうしたの？」

「ちよっと、裏切られちゃって……」

「え？」

「彼が、ニューヨークで……」と言つマミは、かなり落ち込んでい

「どうしたの？」

「浮気なの。どうしたら、いい？」と、彼女が悲しそうに言う。

「……世慣れた感じのする奴だと思ったけど……」

「そんなこと、知らない！」

「でも、誤解かも知れないよ」と言うジュンは、半信半疑。

「何と、垂れ込みがあったの」

「……」

「反省してもらわないと、ね」

「そっちのことは、お任せするよ」と、彼が気のなさそうに答える。

「どうしたら、良いと思う？」と言う彼女は、少し真面目に考え始めているらしい。

「まあ、細工は流々つてことも、あるからな……」と、彼が調子を合わせる。

「へえ……例えば？」

「俺だったら、酔わせた上で……」と言いながら、彼も少しずつ怒りがこみ上げてくる。

「お酒か、何かで？」

「まあ、あまり真剣にならずに……男は、他にもいるからさあ……最近、マジック・マッシュルームが流行っていて……」

「そう言えば渋谷の道玄坂で……兄貴も結構、知っているね」

「また、連絡するよ」と言っ、彼が電話を切るうとする。

「それじゃあね」と言っ、マミは再びウイスキーをあおった。

そっだ、藤江良子に返事を出さなくちゃ。

その約三〇分後、こんなメールができあがっていた。

「良子ちゃんへ、」

お元氣そっで何よりです。

貴方の勤務先がNYになったことは、風の噂で聞いていました。良かったわね、うまく行って！

念のためお伝えすると、私、オーディションを受けるために早

めにウィーンに来ていたの。

それで九月末から、アウガルテン管弦楽団（ここの弱小オーケストラ）に就職が決まりました。エヘン。

それにしてもコンピュータ・ウイルスって、怖いわね。意思疎通がうまく行かなくなるわ。

国谷イサムだったら、知っている。

中肉中背で、フルートが趣味の人でしょう？

言いたくないけど、彼にはウィーンで付き合っている彼女がいるみたい。いつも一緒に、ベタベタしている。

ここの日本人社会、狭いから隠し立てはできないの……だから良子ちゃんも、気をつけてね。

あなた、悪魔にだまされているだけなのよ。

NYで誰か、私に似合いそうな人がいたら紹介してね、今度遊びに行くから。津軽マミ」

そしてマミは藤江良子のメルアドを見ながら、送信した。

「ロラララ、ロラララ、ノノノノノッ！！」

きつと、復讐してやるからなあー！」

.....

サンチアゴを発ってから三日経ち、イサムはウィーンに戻ってきた。

空港でマミを探すが、姿が見えない。出迎えに行くとも言われなかったが、やはり気になる。

早速彼女に電話してみたが、通じない。

その三日後、アルテドナウ・アンサンブルの練習があったが、彼女は一時間も遅れて来た。挨拶も型どおりで、あまり話をする雰囲気ではない。そして練習が終わると、いつの間にか彼女は姿をくらしましていた。

次の朝、彼はこんなメールを受け取った。

「イサムさん、

この間、ニューヨークの友達からメールが来て、貴方が若い女性と親密にしていたって言うの。どう思う？ 人違いだと良いけど、私も就職を控えて忙しいので。マミ」

イサムは驚愕した。

マミにチクったのは、誰だろう。

11・スピロス老人とベルヴェデーレ宮殿

十月から、ウィーンは、すっかり冬だった。

寒さの到来と共に、土地っ子の快活さがなくなり、次第に気むずかしくなつてゆく。

イサムは近頃、アルテドナウ・アンサンブルからも足が遠のいていた。

そして精神的な安らぎを得るため、アルコールに浸っていた。髪が長くなり、体重が増えている。

ちかごろ、町の風物詩の焼き栗クロニが駅前クロニの露店に出ている。みんな、暖かい栗を買っていくのは、新聞紙の袋で手を暖めるためだろうか……。

さつき津軽マミから郵便小包が届いたら、栗を使った季節の和菓子だった。

彼女とはすっかり疎遠になっていたので、とても意外。

早速、昼食後に二、三個口に入れ、御礼の電話を試してみたが、誰も応答しなかった。

.....

「グリユス・ゴット！」と、どこからともなく声がかかった。聞いたことのある、低くて深い声だ。

「誰だ?!」

「お久しぶりだね」と、うなるような声がする。

後ろを振り返ると、体格の良い大男がいる。鷲鼻の上に、サングラス。

どこかで見た覚えがある……そう言えば、デロス島で俺たちを案内してくれた、ガイドのスピロス老人にそっくり!

「あ、どうも。お久しぶり……それにしても……」と、俺は驚きの反応。

「ワシを、覚えていてくれたかい？」

彼の声は、まるで古いアナログ・レコードを遅すぎる回転数で聞くように低く、ゆっくりとしている。どつという訳か、今日は日本語だ。

「えっ？ まあ、もちろん」

ここは、シュテファン寺院に面した広場のカフェ「アイダ」。言わずと知れた観光客に混じり、土地の若ぶった叔母さんやら煙にまみれた叔父さんたちが、広場の大道芸人を眺めながら思い思いにくつろいでいる。ジャグラーが、道化師のはでな衣装で、赤いボーリングのピンを何本も空中に放り投げては、落ちてくる順にまた放り投げる。

俺もその連中に混じり、白ワインを飲みながら鋭気を養っている。

今日みたいな日は、マミとの思い出がこみあげ、涙があふれそうだ。彼女を初めて見かけたコンサート……初めて声をかけた時のこと……そして……。

「Who drinks, wins!」

そう言えば、この間のチリ出張の際、誰かが酔っ払ってそう言っていた。

「だからキリスト教徒は、トルコ軍に勝てたんだよ……ワインを飲んだから……」と、スピロス老人が続ける。

「ヘアー・スピロス、どうして、ウィーンに？」と俺は尋ねてみた。「シツ！ 声をあげるな」

さすがの俺も、周りが気になり始めた。

落ち着け、あせるな、と自分に言い続ける。

確かに、目の前のスピロス老人は顔が青白いのみならず、浮薄

でリアルでない。ガイドの彼が、実は幽霊だと言う噂は、やはり本当だろうか。

「フロイトを知っているかい、ウィーンっ子の？」と、彼が口走る。「何ですか、突然？」

「少し、外で話をしようか」と、声の主が少し乱暴に言った。

「土地っ子に見られてもしょうがないからな」とつぶやきながら、俺はアイデアを出る。スピロス老人がついてくる。

デロス島の恩返しなのか。今日は、俺がガイド。

店を出ると、日差しが結構きつい。

観光客であふれかえるケルントナー通りを下っていく。

そして、そのままフラフラと、ガラス工芸で有名なロブマイヤーの店に入ってしまう。

お店の超絶的に大きなガラス窓と、ディスプレイ。そして、お客さんにさえ気を使わせてしまう、あの格調高い雰囲気。店の奥には、いつものスノビッシュな雰囲気の叔母さんがいたが、こちらを見向きもしなかった。

ここまで来ると、俺も少しほっとする。

いつ来ても、キラキラ輝く美の世界だ。

特にシャンドリアは、豪華かつ華麗。馬の彫り物のある、ずっしりと重たそうなビアマグが目に入った。いつか買おうと思っていた、存在感のあるやつ。

「ぼやぼやしないで！」と、すぐ隣でスピロスが声高に言う。

その辺の商品を割ってしまうといけないので、早々に通りに入ることにした。そして道をさらに下り、三軒離れたCDショップに入ってみた。

ふと隣を見ると、若い東洋系の女性が、CDを選んでいた。

よく見ると、平原さんのお嬢さんではないか！

「その娘に、声をかけてみようか？」と、低く深い声が響き渡る。

そう言えばスピロス老人、結構、好きだったな……。

「もう、そんな年じゃないんだ」と反応。

「ピカソは八十代になっても、町で声をかけていたけどね」と、彼が続ける。

「ピカソは超有名画家だし、絵のモデルをスカウトしていたんだらう？」と、応えてやった。

「そう言えばピカソの描く女性は、二重人格だよなあ？ 鼻が余計にあつたりして……まるでA子とB子が、同じ頭蓋骨に収まっているかのようだ」

店の反対側から、連れらしいアジア系のお兄さんが現れた。年恰好が、俺とか萩谷に少し似ている。むしろ、萩谷似かも知れない。「決めた？」と彼氏が、CDの前で迷う彼女に話しかける。

本当に、萩谷なのか？ 平原さんのお相手なら、そうかも知れない。

「うん、どうしよう……」

「サンバかボサノヴァか……そこまで迷うのは、多分、内部調整がつかないから」と、萩谷氏が不思議なことを言い始める。

「と言うか、お金がないからさあ……」

「それじゃあ、いらぬ方のCDを買うつもりになってごらん」

「え？ 何それ？」と、彼女が反応する。

「潜在意識は、あまのじゃくなんだ。意識と常に張り合い、覇権を争う。サンバのCDを買おうとすると、潜在意識はボサノヴァを主張するんだ」と、彼が説明する。

「ひょっとして右脳、左脳のこと？」と、平原さんが理屈っぽく尋ねる。

「そうでもない。右脳、左脳は、それぞれ逆側、左側あるいは右側の手足とつながっていて……」

「交差しているって、こと？」

「そう。すると心臓を守るには、右利きが便利だけど、これは左脳中心主義。そう言えば舞踏会では、男性が女性の左側に立つだろう？ これは、男性主導のダンスにするため……心臓のそばに立てれると、少し神妙になるよね」と、萩谷が横道に入り始める。

「へえ、そうかなあ。それじゃあ意識は、左脳系なの？」

「そうとも限らない。右利きでも、やっぱり左の手足も使うから。むしろ大脳皮質らしいんだ」と、彼が答える。

「それじゃあ、潜在意識は？」と彼女が、少し反発した言い方をする。

「心臓なんかを調律するのが自律神経系で、これは視床下部の管轄のもとにあるらしい……潜在意識は自律神経系を操るから、やっぱりその辺に宿るんじゃないかって……」と、彼が苦しそうに説明を試みる。

「イサム、聞いたか？ 右大臣、左大臣では、右大臣の方が偉いんだってよ、殿様を安心させるから」と、スピロス老人が突然、カミングアウトする。

何とも、不思議な話だ。

多分これは、茶番劇。

大体、スピロス老人の様子が少しおかしい。デロス島の道案内では、ないかも知れない。

古今東西、お化けや幽霊伝説のない土地は……ない。日本では、ろくろつ首や傘のお化け……西洋には、Fairy……ウィーンには、精神分析のフロイト博士を翻弄した奴が、出るに違いない。

「よし、サンバにしよう」と、彼女が言った。

俺も気を取り直し、手にしていたラップのCDを買うことにした。アーティストが殺人事件を起こした有名なやつだ。

萩谷と平原さんが、店を出て行く。

「イサムウー！ お前は少し、軽薄だったな……」と、スピロス老人の低い声が響き渡る。

「からかうなよ！」と、俺は思わず言っただけ。

そしてCDショップから、外の通りへ。

「お前の潜在意識は鬱屈しているんだ、たくさん情報を抱えながら」と言いながら、スピロス老人が突然、サングラスを取る。

隠れていた左の義眼が、キラリと光った。

「だから解放されたがっているんだ、ありとあらゆる手段を使って……」と、そいつが得意そうに続ける。

俺は驚愕しながら、道を歩きはじめた。

こいつは、俺をかつごうとしてに違いない。大体、この土地の人間の言うことなんか、ゴルフのスコアのように……気を付けていないと、時々すごくいい加減だ。

「どうして、突然出てきたんだ？ 今までどこにいた？ 帰ってくれよ！ デロス島に戻りやがれ！」と、俺は叫んだ。

その途端に額に激痛が走った。そこを手で押さえながら、俺は驚愕した。

血だ！

「津軽マミは、嫉妬に狂っているんだあー！」

「え？」

「彼女の怨念を、はらしてやるべきなんだ」と、そいつが続ける。

「え？ どうやって？」

「手始めに謝ってみたら、どうだ？」

「それは……」と言う俺は、すっかり動揺している。

「音楽やるんだよな、お前？」

「はい……」と答える俺は、恐怖におののいている。

「ワシは、そう言うアホに弱いんだよ、『音楽の都』で真面目に追求しようとする奴。そんなのに限って、女心が分からない。」

さあ、ベルヴェデーレ宮殿まで行こうじゃないか！ あそこから、ポーランド国王がトルコ軍に突撃をしかけた、カーレンベルグの丘がよく見えるんだ」と、そいつがヒステリカルに叫び、そしてケラケラ笑い始める。

何のことだか分からないまま、俺はまるで催眠術にかかったように、素直に宮殿に向かう。

ベルヴェデーレ宮殿は、オイゲン公の夏の離宮だった。数々の戦勝の御褒美に賜ったらしい。

ゲートから入っていくと、周囲の壁に隠れていた瀟洒な宮殿と、広大な中庭が現れる。

よく見ると宮殿の玄関の両側を、神話上の動物、スフィンクスが守っている。体は鷲のような翼のあるライオンで、頭は美しい女性。エジプトのピラミッドを守っている奴と、同じだ。

「イサムウー、俺がここのスフィンクスに代わって、通行条件の問題を出してやるから、聞け！ 鷲とライオンを合わせると二十匹、足が合わせて五十八本だしよう。鷲とライオンの数を当ててみる！」と、そいつが藪から棒に、ふっかけてくる。

「勘弁してくれよ！ 何のつもりだ？」

「解いてみる……充分、若いんだから！」

「いや、もう、三十一歳だからね……」と、俺は気落ちしながら答えた。

「よく考える。ライオンを二種類の動物に分けてみるんだ、ゲジゲジみたいに切り離して……デロス島にも、半分崩れたライオンがいたよなあ？」と、そいつが得意そうに言うではないか。

「えッ？」

「ライオンを、ライとオンの二つに切り離すんだ。ライはライオンの前半部分で、頭に前足二本。たてがみも入る。オンはライオンの後半部分で、尻尾や後ろ足二本が含まれる。すると五十八本は、鷲ライ、オンの足の総和だ！」

「はああ？」

「これを二で割る。すると、みんな二本足だから、全部で何匹か、たちどころに分かるんだ」

「すると、三種類合わせて二十九匹か？」

「そうだ。筋が良いなあ、お前。ワツハツハア！ すると、二十九匹から二十匹を引いた九頭が、ライオンの数だ」

「何故だ？」

「よおしく、聞け。ライ、オン、そしてライオンの数は、当然のことながら常に一致する。ライオンの前半あるいは後半部分が、余っ

ても足りなくても、困るよなあ？」と、そいつが強調する。

「まあ、確かに……」

「だから驚、ライ、オンで二十九匹、と言うとライオンを二重に数えているんだ。ワッハッハア！」

「その笑いだけは、やめてくれ！」と叫びながら、俺は頭を抱えてしまう。

「ライオンは九頭だ。すると驚は十一匹！」と、まがいものスピロスが得意げに叫ぶ。

俺は正直、ちぢこまってしまった。

「ついでにライも九匹、オンも九匹だ」

一呼吸おいて、俺は気を取り直した。

「どうして、そんな話を?!」

「まあ、そう、あせるな。と言うか、九と十一が出たところで、今度は歴史の話をさせてくれ。昔、ウィーンがトルコ軍に包囲された時、ポーランド国王が助けに来ただろう?」

「それは、一六八三年。何が、言いたい?」

「その日付が、九月十一日。ところで今度はオイゲン公が、セルビアのゼンタでトルコ軍を蹴散らしたけど、それはいつだった?」と、更に問うて来る。

「確か、一六九七年」と、俺が答えてやる。

「ところが、やっぱり九月十一日だったんだよ! イサム、気をつけるよおお! ワシはなああ、津軽マミの遣いだ。メッセンジャーだ〜!」と、そいつの声がただならぬ深いエコーで、あたりに響き渡る。

「ニューヨークで、何があつたんだあー?」

「待ってくれ! 誘惑されたんだ!」

「嘘だ!」

「俺のせいじゃ、ないんだ!」

「素直になつたら、どうなんだ?!」と、そいつが詰め寄る。

「正直、チリで負けて……」

「それで？」と言う奴の声は、少しゆっくりとしたトーンになる。
「フェリーに酔ったんだ、本当に。藤江良子は、ほんの……」
「やっぱり！ マミの嫉妬は恐ろしいぞ、よく覚えておけ！……と
ころで来年だが、九月十一日、ニューヨークの貿易センタービルだ
けは、避けた方が良くも知れないなあ……」
「えっ？」

「九月十一日だ。九月十一日！ トルコ軍が二回も、オーストリア
軍に負けた日だ！」

「そんなの、偶然だろうが！ 分かったから、もう、消えてくれ！」
「ほう？ 態度でかいなあ、お前。映画のインデペンデンス・デイ、
知っているか？ ちょっと怖いよなあ……真似する奴が、本当に出
てくるかも知れない！」

「……マミに会うから……話するから……消えてくれ！」

「いやいやワシは、潜在意識のような、天性のあまのじゃくなの！
そんな態度じゃあ、だめ！」

そこで、さすがの俺も、ひらめいてしまった。

正反対を、言ってみようじゃないか！

「それじゃあ、ずっとここで俺をいじめてくれ、頼む！」
するとそいつの姿が、魔法をかけられたように、ふっと消えて
しまった。

そして俺は目を覚ました。

何と、ベルヴェデーレ宮殿の中庭のベンチの上で、居眠り。

陽が沈もうとしており、あたりは薄暗い。

向こう側に、宮殿の低い方の建物が見える。そしてシユテファ
ン寺院の尖塔も。顔をあげると、遠くの方が明るく、カーレンベル
グのずんぐりとした丘がぼんやり見える。

頭が重い。しかも、冷や汗をかいている。

小さな男の子が二人、こっちを指さしている。彼らの手には、
小さなジューズの缶。

額の汗をぬぐうと、その色が赤かった。

本当に血が出たんだ！ 幽霊は、本当に出たんだ！！！！

「こわい」と思いながら、俺は震えていた。

しばらくして我に帰り、時計を見ると四時半だった。背広の上にコートを着ているが、すっかり冷え込んでいる。

「ああ、畜生！ チリの選挙が、こんな不運をもたらしやがって！」俺はその場で、二回立て続けにクシャミ。そして鼻をすすりながら、顔を上げた。

すると、宮殿を守るスフィンクスの彫像が、ニヤリと笑っていた。

そこから漂う、ただならぬ妖気！

ゾーツと、鳥肌が立つ。

金縛りされたかのように、身体が言うことを聞かない。

西の方に、明るい夕焼けが見えた。

俺はワラをも掴む気持ちで、夕陽に向かって叫んだ、

「助けて、助けて……助けてくれ！」と。

すると、暖かな光線がじわじわと体に浸透し、次第に解放されていく。

12・旅立ち

その晩、イサムは風邪をひいて調子が悪かったが、マミに電話を入れてみた。

「ハイ。津軽です」と、珍しくも彼女は素直に出てきた。

「イサムだよ。変な夢を見たんだ！ ミコノス島のガイドの、スピロス老人が出てきて……」

「ちよっと、声が変わ。熱があるんじゃない？」と言う彼女の声は、少しこわばっている。

「そんなこと、ないよ……そう言えば、お菓子のお礼も言いたかったんだ。結構、うまかった」

「そうでしょうか？ 赤坂の有名な店なの」

次の日、イサムはマミと、ケルトナー通りのシルク・カフェで話しこんだ。

「夢は、ベルヴェデーレ宮殿で見たんだ。スピロス老人みたいな奴が、わめきちらしたんだ。生きた心地しなかったよ！」と、彼が切々と訴える。

「聞いた、聞いた」

「ダンスの好きな、萩谷と平原さんも登場しやがって……」と言う彼の説明は、焦点が定まらない。

「……へえ……」

「スピロスの奴、来年の九月十一日、ニューヨークの貿易センタービルには近づくな、と言っていたんだ。思い出せばマミの受けたオーディションで、審査員が騒いでいた話と、少し似ていない？」

「そう言えば、しきりに九月十一日とぶつぶつ言いながら、取り乱していた奴がいたわ。でも、ニュー　ヨークの話は出なかった」と、彼女が平然と答える。

「ひよっとしてマミ、夢のいきさつと関わりなかった？」

「えっ、何で?!」

「いいや、スピロスが、マミに呼び出されたと何回も繰り返しているから……」

「それって、本物の幽霊じゃない? 彼は、あだ名が『幽霊スピロス』で、祖国に身を捧げた英雄よねえ……」と言いながら彼女は、確信に満ちた目をするではないか。

「彼は、マミの遣いと称してね……」

「へえ……それで?」

「お前に謝って、言うんだ」

「なぜ? どうして?」と、彼女が追求する。

「不信感を抱かせたら、悪かったって……」

「具体的に言う?」

彼女は、追及の手を緩めない。

「誤解だろうけど……」と、イサムが弁解しはじめる。

「誤解、かなあ?」と言いながら、彼女は、灰色の瞳を鋭く輝かせた。

「いいや、誤解、勘違いだよ」

「そうかしらね……へえ……」

「夢の中で痛いと思ったら、額から本当に血が出たんだ……」と言いながら、イサムは、悪夢のフラッシュバック。

「トマトジューズか何か、かけられたんじゃないの?」と、彼女が新説を展開する。

「トマトジューズ?」

ああ、そう言えば、男の子が小さな缶を持ったまま、俺を指さしていたっけ……トマトジューズ?

「蚊に刺されたかも知れないし……やましい気持ちだが、夢に現れたのよ」とマミが続ける。

そう言えばフロイトは、やたらに夢に凝っていたっけ……とイサムは、自閉的になっていく。

マミはいたたまれず、席を立った。

「私、もうそろそろ行かないと……」

次の日、シヨックさめやらぬイサムのところ、萩谷がやってきた。

「大変だったなあ、お前……マミは言ってみれば、ほとんど魔法使いだね！」と言う萩谷は、最初から確信に満ちていた。

「それは、ひどい言い方だと思うけどね」

「彼女は芸術家で、しかも二重人格。マミAとマミBなの。しかも、シャーマンの血を引いている。何か、とんでもない霊能力を発揮したに違いない」

「俺は、ギリシャで出会った老人の幽霊かと思ったけど……」

「甘い、甘い。マミの復讐だよ。彼女が、夢を演出したんだ」と言う萩谷は、あくまで自信たっぷり。

「そいつ、来年の九月十一日は、ニューヨークの貿易センタービルに近づくなと……」と言いながらイサムは、少し気弱になっている。「へえ……お前、変なヤクとか、飲んでやしないよなあ？」と、萩谷が追求し始める。

「とんでもない」と、イサムが強調する。

「夢を見た日の、昼めしは？」

「確か、ポルチーニ茸と御飯を混ぜて……」

「キノコ？」

「青果市場で売っていたんだ」と、イサムが野暮ったく答える。

「本当に、ポルチーニ茸だろうか？」

「香りもそれなりに……何か問題でも？」と、イサムが怪訝そうに尋ねる。

「最近、マジック・マッシュルームが問題になって……」

「何、それ？」

「中南米のシャーマンが使うキノコでね……無味無臭の幻覚剤」と、萩谷が優等生ぶる。

「そんなの、推理小説の読み過ぎだね」と、イサムが言葉を返す。

「トランス状態を誘発するらしいんだ。要するに、潜在意識を呼び覚ましてしまふ。酒にも、よく似た所があるんだろうけど」と、萩谷が強調。

「へえ……」

「キノコは間違えると、とんでもないからなあ。それで昼は、キノコメシだけ？」と、萩谷が追及する。

「あと、ソーセージ。それに、ママから送ってきた生菓子」

「おっと、それは初耳！ マミとは、しばらく絶縁状態だったんだろう？」

「お裾分けだと思うけど……」

「それで、どんな味だった？」と、萩谷が詰め寄る。

「何の変哲もない、栗の和菓子だけどね……」と、イサムが思い出しながら答える。

「とにかく彼女とはもう、別れたほうが良いよ」と言う萩谷は、真剣そのもの。

「結論を、急がないで欲しいね」と、イサムがけん制する。

「そのうち、本当に殺されるぞ！」

「いやいや、それはパラノイア……」

「きつと彼女は就職して、変わったんだよ。そもそも、女はみんな気まぐれで、二重人格……人間と魔物が、同居しているんだ。ママは、激した途端に魔物が勝ってしまつて……何で今頃、食べ物差し入れをしてくると思う？」

「母親からたくさん、送ってきたんだろう」と、あくまでナイーブな口調のイサム。

「そうかなあ……それは少し、トロイの木馬だと思うけどね」

その二週間後、ピカ忠商事の東京本社から、イサムに通知が届いた。

「正社員に採用する。これからチリのサンチアゴ支店で働くように」彼もさすがに、これにはびっくりした。

正社員……一応、長年の夢がかなった形だ。でも、南米とは……出張の際に世話になった蜂須賀さんのところだ。マミとは、離れ離れになってしまおう、と思いつつイサムは、彼女に電話を入れた。

「転勤が決まったよ！」

「え？ どこに？」

「南米のチリ。この前、出張しただろう？」

「……大変ね……」

咄嗟にイサムは、口走ってしまった、

「一緒に来ないか？」と。

「ええっ!？」

「悪くないと、思うけどね」

「冗談じゃないわ、行かない……」

「考えてほしいんだ」と、彼が押す。

「少し勝手じゃない？ 今までの苦労を棒に振れって言っの？」

「音楽はチリで続けりゃいいじゃないか。一緒に行こうよ！」

「イサムは、信用をなくしたのよ！」と、彼女は言いたいことを言う。

「勘弁してくれよ……」と、彼が懇願する。

「だめ、だめ！」

そこでイサムは、人生の分岐点を感じながら、諦めることにしたのだ。

「マミとは、お別れかも知れない。彼女は、一筋縄ではいかない……プロのミュージシャンになったところだし……」

出発の朝、空港へ向かう車に同乗してくれたのは萩谷だった。雪もなく、晴れ間さえ見える日だった。

マミはキャロルと一緒に、ナツシユマルクト地区のアパートの玄関先まで来てくれた。そそくさとした別れだった。

イサムは、涙を見せないようにしながら車に乗り込んだ。

「お前、ここよりチリの方が絶対明るいぞ、新天地で正社員だし……」

…」と言う萩谷も、涙をこらえている様子だ。

車の窓ガラス越しに手を振ると、キャロルもマミも、それに応えて手を振る。窓を開けよう、とイサムが思っや否や、車はアパートから離れて行く。

空港には、本間支店長や平原さんら、PIKACHUの関係者が見送りに来ていた。

出国カウンターでは、フィッシュマン先生やチユンさんが待っていた。

握手しながら彼らが、

「また、是非どこかで会いましょう」と言っていたのが、心に響く。

みんな、元気で……とイサムは祈った。いろんなことがあったけど、一人一人、心の支えだったんだ。

彼の搭乗した飛行機は、これ以上にならないほど速度を上げると、機首を突然上げ、ごう音と共に大空に舞い上がっていった。

13・それから

二千二年の春のことである。

イサムは休暇をとり、チリから帰国していた。

夕方、彼は、銀座はプラタン前の交差点の手前にいた。そこにヴァイオリンのケースを抱えた女性が通りかかった。

「あ、津軽マミだ！」

背格好と言い、目鼻立ちと言い……そして、ヴァイオリンのケースに太く黄色いテープで貼ってあるMとTの大文字。

赤信号で、彼女が立ち止まる。駆け寄って彼女の肩をたたきながら、

「津軽さん！」と声をかけると、彼女は少し不快そうにイサムを見た。

そして、みるみるうちに表情が驚きに変わる。

「やっぱりマミだね！」

彼はもう、喜色満面だった。

彼女は髪が少し短くなり、化粧が心持ち濃くなっていたが、あの特徴的な灰色の瞳が全てを物語っていた。

「国谷さん？」と言う彼女の声は、そこまで変わっていない。

「そう！」と言いながら、彼は、どうしても胸の高鳴りを覚えてしまっ。

「どうして？」

「今、休暇でチリから帰国していてね……」

「へえ……」と言いながら、彼女はイサムの頭のとっぺんから、足の先まで一瞥する。

「少しやせたわね、あの頃と比べると……」

「そう？ マミちゃんは、どうしているの？」

「相変わらずアウガルテンで弾いているわよ。従兄弟の結婚式のために、帰っているの」と、少しためらいがちに彼女が言った。

「あ、そうなんだ」と、彼はびつくりしながらも、一応にこやかに答える。

そう言えばチリに着任したての頃、マミにメールしたら返事は来たものの、交信は続かなかった。

「そう言えば藤江良子から連絡、ある？」と、彼女が尋ねた。

「いや、ない。心配してるんだ」

「無事だと、良いわね」

「新聞に出た犠牲者の名簿には、載っていないなかったけどね」と、彼が言い放つ。

「行方不明？」

半年前の九月十一日、ニューヨークの貿易センタービルで、あの震撼とする大規模テロ事件が起こり、世の中が変わりつつあった。こともあるうちに、その日、そこに近づくなとする、スピロス老人の警告は、的中してしまった。

藤江良子とは、その頃から音信不通。

イサムはチリに着任したところで近況報告を兼ね、彼女の働くオフィスビルにまつわる、この恐ろしいような警告の内容まで「ryoko.fujie@sohgyo.com」宛てに伝えていたのだが……。

信号が、青に。

「今、時間ある？」と言いながら、イサムはあわててマミに名刺を一枚渡した。

「私、急いでいるの。ウィーンから戻ったばかりで……」と言いながら彼女は、信号の点滅を見ながら横断歩道を渡りはじめた。

その時だった！ 突然、どこからともなくバイクが突っ込んできた。

そして、彼女の鋭い悲鳴。

バイクがすごい勢いで走り去っていった。

「大丈夫か!？」

返事はない。彼女はそこにたおれ、足から血を流している。イサムは彼女の肩を抱き、上半身を支えようとした。通行人が集まってくる。

「ヴァイオリン、ヴァイオリン……」と、彼女は懸命に楽器を探している。

「救急車を呼んで下さい！」と、彼が叫んだ。

「大丈夫よ」と気丈そうに彼女が口走る。

こんなことって、ありうるのだろうか、東京も銀座のど真ん中で！近くの交番から警察官が駆け寄り、間もなく救急車が来た。彼女が担架で運ばれていく側をイサムが小走りについていく。そして一緒に救急車に乗ってしまう。

サイレンを鳴らしながら走る救急車の中で、ママはくやしがつていた。

「ひどい、ひどい……」

「ヴァイオリン目的の当て逃げですね」と、救急隊員が彼女の足に応急措置を施しながらつぶやく。

結局、彼女は入院せざるを得なかった。

イサムは、毎日のように彼女を見舞いに行った。

すると、彼女はいつも悲しそうに言うのであった、

「ヴァイオリン、まだ見つからないの」と。

「でも、予備の楽器が、あるんだらう？」

「そう、クレモナで買ったのが……でも、愛着って、あるじゃない？」

「きつと、出てくるよ」

ところが、信じられないことが起きてしまった。

入院五日目の夜、ママは病室から突然消え、二度と帰らなかった。

翌朝、病院の中庭で発見された時には、すでに事切れていたらしい。

イサムのところには、ウィーンで世話した彼女の兄ジュンから P I K A C H U (株) を通じて連絡が入ったのだ。

「そのうち南米にも、演奏旅行したい」と言うのが、彼女から聞いた最後の言葉になってしまった。

死因は心不全と言う話だが、それもよく分からない。

ひよつとして、夢遊病を患っていたのだろうか？

翌々日にお通夜、そして次の朝、告別式の運びとなり、イサムは悲嘆にくれながら両方参列した。

棺の中、白い花に囲まれて眠る彼女はとても穏やかで、安らかな表情をしていた。

こんなに若くして、逝くとは！

イサムは悲しみのどん底に突き落とされ、親戚一同の気持ちがよく分かるような気がした。

御両親やジュンに対し、何と言って慰めたら良いのか、分からない。

ところが驚くべきことに、告別式でイサムは、亡くしたはずの人に出会ってしまった！

彼は、胸の鼓動が高まるのを感じながら、思わず大声で、「藤江さん！」と、喪服姿の良子に声をかけてしまった。

「国谷君？」

「無事だったんだね！ 心配したよ……」と言いながら、イサムは、ほつと胸をなでおろす。

「私は偶然、命拾いしたの、出張中……でも、同僚や仲間が……」
と言いながら、彼女はうつむいてしまう。

「そうだったね……」と答えるイサムの脳裏には、ニューヨークで二本の貿易センタービルに、旅客機が次々と突っ込んでいく、半年前の恐ろしいシーンがよみがえる。

「そう言えば、ウォーニングをいただいた？ どうして、あんなことが分かるの？」と、疲れきった表情で彼女が答える。

「あの時のメールでも書いたと思うけれど、俺がウィーンにいる頃、夢の中で警告を受けたんだ。信じがたいけど、一説に因れば、夢はマミの仕業で……実は彼女がオーディションを受けた時、遅れてきたアメリカ人の審査員が興奮しながら『九月十一日』と、わめいたらしくて……」

「まさか、国谷君が犯行グループにいたわけじゃ、ないわよねえ？」
「俺は、関係ないよ」と、彼が吐き捨てるように言った。

「私にあんなウォーニングをくれたの、国谷君だけなのよ。マミが情報の震源地なら、彼女からも注意喚起してくれそうじゃない？だから……」

「それはマミに聞かないと、最終的には分からないね。あの夢は、ニューヨークの事件を予告してきたところが、確かに正夢で」

イサムの涙は、三日三晩、止まらなかった。

マミと一緒に過ごした時間が、走馬灯のように脳裏を駆け巡り、あらゆる自責の念が支配しようとする。

要するに、「銀座の交差点で声をかけなかったら、マミは、今も元気で生きていたんじゃないか」と言う、非建設的な悩みなのだ。
「まあ、歴史は多分、変えられない……そして人の一生も。マミの命運も、生まれた時から決まっていた、と考えたら楽だろうが」と慰めてくれたのは、萩谷だった。

「そうかも知れない。少なくとも、藤江良子は生きていたじゃないか。その点を評価しないと……」

ヴァイオリンが発見されたのは、初七日が明けてからだだった。

警察は先ず、イサムに通報して来た。

彼が出向くと、白手袋の若い女性係員が、発見された物を見せしてくれた。

「この楽器ですが、見覚えありますか？」

ケースの取っ手のそばで、大文字のMとTが、自己主張してい

る。

「なるほど……津軽マミのものに間違いないです。このイニシャルも……」と言いながらイサムは、指示に従って白手袋をつけた。

そして係員がケースからヴァイオリンを出してくれるのをしげしげと眺め、ネックの部分を持ちながら楽器を丁寧に点検する。

さしたる傷は、見当たらない。

「あっ！」

良く見ると、柄の部分には「一九一二年」の製作年号が小さく、しかし丁寧に記されていた。

「これは、運が良いんですよ。そもそも、出てこないんだから」と、その係員が彼を諭す。

「ウィンにいる頃、彼女は一九一二年製のこの楽器で、オーディションを受けて合格したんです……形見なら、チリに持ち帰ろうか」とつぶやき、イサムが沈みこむ。

「御遺族と、よく相談して下さい」

(完)

ウィーンに出たあまのじゃく

13 ．それから（後書き）

1・出会い

ウィーン楽友協会のブラームス・ザールは、ほぼ満席だった。舞台中央には、グランド・ピアノ。

しばらくすると、会場がしんとした。

背の高く痩せた男性が黒い燕尾服姿でステージに現れ、にこやかに挨拶する。その髪が、カラスのように黒い。

聴衆が、おとなしめに拍手する。

ところが、前の方で少し派手目に拍手する若い女性が、イサム の目にとまった。

この辺では見かけない人だと思いながら、その長い黒髪に、は っとする。

「日本人だろうか」

グランド・ピアノの甘くきれいな音色が、ホールに響きわたり 始める。

当時、藤江良子はニューヨークで平穩無事に暮らしていた。あ んな悪夢のような大規模テロ事件は、映画でしか考えられないよう な時代だ。

むしろ、新しい彼女が見つからずに少しめげていたのは、イサ ムだった。

彼は、あの古めかしくも小さな都を「ヴィエンナ・ランド」と 揶揄する始末。

「世紀の変わり目なのに、ここはまるで、十九世紀のテーマ・パーク。来る者はみな、ハプスブルグ時代の栄光や伝統、そして音楽に 酔っぱらってしまい、現実を忘れていく」とでも言いたかったのだ ろう。

ウィーンは、オーストリア・ハンガリー帝国への郷愁を呼びお こす町。

周囲の丘から見下ろすと、ドナウ河の傍らに広がるこの都には、実にたくさん教会がある。

その尖塔や鐘楼は、まるで天を目指すかのように、高い。少しでも崇高なものに近づきたい人間たちの、切ない願いがこめられているに違いない。

その昔、町の周囲には城壁があつたらしい。今でこそ環状道路「リンクシュトラッセ」にすり替わっているものの、城壁内の古い町並みや狭い路地、そして貴族たちの館や宮殿が、実によく保存されている。

この界限では、名物の二頭立て馬車「フィアカー」が観光客を乗せ、パツコロ、パツコロとゆっくり走り、のどかな雰囲気を醸し出すのである。

「ヴァイオリン、そこは、ピアノニツシモ。押さえて！」と、タクト棒を振り上げながら、茶髪でアフロ・ヘアのエーバーハート・フィツシユマンが声を張りあげる。

彼らが繰り返して練習しているのは、シュトラウスの「美しき青きドナウ」。

新入りの女性ヴァイオリニストは背が高く、細身であつた。そして長い黒髪。新しそうな深緑のパンツ・スーツに身を包み、いかにも年代を経ていそうな褐色の楽器を器用に操っている。

出番待ちのイサムは、フルートを膝に「休め」の姿勢で構えたまま、彼女の方を見ながら、思いをめぐらせる。

「彼女は、まるで『洋装の雪女』あるいは『銀河鉄道スリーナイン』のメーテル。立ち居振舞いも……弓を操る姿も、流麗だ」

彼女は、確かに東洋人にしては少し色白であつた。折に触れ、輝くような瞳で周囲を見まわすようだ。長い黒髪が美しく、物腰柔らかく、あでやかな感じがする。

そして、とにかく姿勢が良い。

ひよつとして、この間のコンサートで見かけた女性？

「フルート、そこをしっかりと！ スタツカートで！」と指揮者のフィッシュマンが口ひげの下から声を張りあげる。すぐ左でファーストを吹いているチュンさんにもテンションが走る。

まもなく曲目がレハールに変わった。彼のオペレッタ「メリー・ウイドウ」からの選曲だ。二十世紀初頭の作品だが、ウィーンでは相変わらず大変ポピュラーで、ロンドン・ミュージカルの「マイ・フェア・レディ」のような古典なのである。

マエストロ・フィッシュマンが壁の時計を見やると八時だった。

彼はそこで満足そうに自分の口ひげを確認すると、アルテドナウ・アンサンブルの楽士達に休憩の合図を送ってくれた。

イサムもほつと息をつき、銀の楽器を口元から離す。

彼は三十一歳。札幌の生まれだった。まるで少しつぶれた感じのエルヴィス・プレスリー。

彼はもともと東京の大学でドイツ語を勉強していたが、バロック様式のウィーンのたたずまいに魅せられ、吸い寄せられるように移り住んで建築の勉強をしていた。しかし、自分の限界を知るようにになり、いつしかこの銀座通りとも言つべきケルトナー通りに面した日系商社の「PIKACHU」に身を寄せたのである。

彼はここで食料品専門のユリウス・マイル社と提携してワインや生ハム、ハンガリーのサラミ、イタリアの白トリュフやオリーブ油など、食材の輸出入を手がけていた。そして、いつか「PIKACHU」の本社雇いの正社員となることを夢みていたのだ。

「あの娘は二十五歳くらい……いや、もう少し年上？ こちらに気づいてくれただろうか？ ひとまず挨拶してこよう」と思いながら、イサムは彼女の様子を見に行くことにした。

そして他のヴァイオリニストにも気を遣いながら、彼女の傍らに来て声をかける。

「こんにちは。日本の方ですね」

「ええ……」

「国谷です。初めまして」

「津軽です。どうぞ宜しく」と答えながら、彼女がにっこり微笑んだ。意外と声が深く、しゃべり方が落ち着いている。

そして彼女の大きな瞳は、何となく、猫の目のように灰色がかった。普通の日本人と少し違うのだろうか？ なかなか目立つのである。

「ひよつとしてこの間ブラームス・ザールで、ヤツサのピアノを聴いていませんでした？」

「あ！ ばれちゃったかな……」と、彼女が嬉しそうに答える。

「ウィーンは、狭いから……それにしても、音がよく溶け込んでいますね」と言いながら、イサムは笑みを浮かべた。

「いいえ……とんでもない」と彼女がはにかんだ。長い黒髪がゆれる。

よく見ると、彼女の深緑のスーツは、襟の部分が黒いヴェルヴェットであしらわれている。

「どうやって、この楽団を見つけたの？」と、彼が尋ねる。

「この大学の研究生なんです」

「ウィーン音楽大学ですか。じゃあ、もう、プロだね」

「いいえ……これから大事なオーディションがあるので、もう少し鍛えないといけないんです」と言いながら、彼女は少し怪訝そうな顔をした。

「試験は、いつ？」と彼は聞いたが、しまった、唐突だったかも知れないと後悔する。

「まだ少し先で……」と言って彼女は目を伏せた。

彼女はやはり、色が白いようだ。

「それじゃあ……希望と期待の日々ですね」と彼が言う。

「いいえ、とんでもない」

彼女は、また少しはにかんだ。

そこでイサムのは目は、思わず彼女の胸のふくらみに行ってしまう。特段目立つわけではないが、とてもゆかしく見えるのだろう。

彼女もそれに気がつき、少し語調を強めて言った。

「私、今、待機中で……書類審査やCD審査は通ったけど、まだ本番を控えているんです」

フィツシュマン先生が指揮台のところに戻り、少し短気っぽくタクト棒で指揮台をたたいた。練習再開だ。

最初の曲は、ビゼーの「アルルの女」。

フランスの作曲家はフルートを多用する傾向があり、ビゼーも御多分に漏れず、この組曲の優雅な「メヌエット」や早い踊りの「ファランドール」でフルートやピッコロを主役に仕立てている。

それゆえチュンさんもイサムもよく練習し、特にイサムは銀のフルートを黒いピッコロに持ち替えて、成果を披露するのであった。彼らは、ともすれば高音域の伴奏や効果音中心になりがちなので、主旋律を受け持つ場面は、とても気分が良い。

チュンさんのソロで奏でる「メヌエット」は甘く、優雅で愛らしく、流麗。

続くは、シュトラウスの喜歌劇「こもり」序曲。

そしてチャイコフスキーのバレエ組曲「クルミ割り人形」。

一時間くらい経っただろうか。

ようやくマエストロが練習を終わりにしてくれた。

イサムは手早くフルートをケースにしまい、ヴァイオリンを操っていた彼女のところへ、足早に行ってみる。音楽家は解放されたくて、早めに逃げてしまうので、すばやくつかまえないといけないのである。

「津軽さん！」

「ハイ」と振り向く津軽さんの目はフレンドリーだった。

「一緒に帰りませんか？」

「ええ」と言つて彼女がうなずいた。そして嬉しそうに身支度を急いだのである。

彼女が楽器をケースにしまうと、外側に黄色いテープで、MとTの大文字が記されていた。

ウィーン音楽大学の建物からヨハネス通りに出ると、あたりは真っ暗だった。

「わあ、寒い！」

さすがにまだ二月だ。

玄関の外の石の階段に出てきたところで、イサムは手を伸ばし、彼女の手を支えてあげる。

彼女は少し恥ずかしそうな顔をしたが、彼は、こういう気遣いはウィーンでは当たり前前、と言う態度。

階段を降りたところで彼女の手を離す。そこでイサムは、身長がちよと釣り合う、と感じたのであった。

そして二人は、コツコツと石畳を踏みしめ、夜道を歩きはじめた。電灯はまばらにしかないが、楽団仲間が同じ道を急いでおり、心強い。

「慈善団体のオーケストラって、面白いですね、色んな方がいて」と、彼女が話しかける。

「そう、基本的にアマチュアだけど、優秀なメンバーもいるんです」「フィッシュマンさんは、あそこの教授だし……」と、彼女が独り言のような言い方をする。

「どちらの御出身ですか？」と、イサムが尋ねてみた。

「東京です」

「なるほど……僕は、札幌です」

「へえ……私の父母も確か、北国の出身なの」

二人はようやくケルトナー通りに出てきた。目抜き通りは、さすがに明るい。

結構、人通りがあるが、ガラス工芸のロブマイヤーとかベネトン

とか、有名ブランドのお店は、ほとんど閉まっている。

この街に特有の、赤、黄、紫色の丸い影絵風の光の広告が、足元の石畳に突然投影された。

「連絡先、教えていただけますか？」と、彼が別れを意識し、声をかける。

「ええと、メルアドを教えてくださいただければ……」と彼女が躊躇しながらつぶやく。

イサムは、コートの更に奥の上着の内ポケットから手帳を出すと空いているページに、ludwig@chello.atと、丁寧に書き込んだ。そして、

「はい」と言つて、その紙を津軽さんに手渡した。

彼女が、うやうやしく受け取る。

「それじゃあ、ここで」と、イサムが別れを告げた。

「じゃあ、また」と彼女が手を振る。そして足早にケルントナー通りを北の方向に去つていった。

津軽さんか、なかなか可愛いし絵になるね、との思いを抱くイサムであった。彼女は、今まで見てきた留学生とは少し違つかも知れない……少々自信ありげだし。

イサムにマミの電子メールが届いたのは、その三日後だった。

「パソコンが見つないばかりで調子が悪く、連絡が遅くなりました。今後とも、どうぞ宜しく。津軽マミ」

発信元は「mamimitsu@hotmail.com」であった。

随分とじらされたものだ……もう諦めるところだった。早速、返信してみようか。

「津軽さん、メールどうも有り難う。来週の土曜日あたり、一緒に出かけてみませんか？ 天気がいいと、とても気持ちがいいですよ。国谷イサム」

今度は、彼女から意外と早めに返事が来たのである。

「私のメール、うまく届いたようですね。実は、暖かい帽子を買いたいのですが、つきあってくださいますか」

イサムは、今度は電話を入れてみることにした。

「シンガー・シュトラッセのそばに一軒あるけど、行ってみませんか」

「それなら、とても近いので……よろしく願います」

「それでは来週の土曜日、十一時半に現地で会いませんか。地図を見て、来られる？」

「多分、大丈夫です」

2・ヴァイオリン奏者と添乗員

約束の日は晴れていたが、とても寒かった。

帽子の店は、町のおへそとも言つべきシユテファン広場から伸びる、シンガー・シユトラッセ（シンガー通り）沿いにあった。

当日、イサムは大分早めに着いていた。

帽子屋さんの大きな窓ガラスから覗き込むが、彼女は未だ来ていない。

そこで彼は寒さを凌ぐため、すぐ隣のデリカテッセンに入つて時間をつぶすことにした。冬なのに、ガラス・ケースの中でトマトやピーマンなど色とりどりの野菜のオリーブ油漬けなどを売っており、しばしほっとする。

ここでは、冬場になると新鮮な生野菜が不足するので、とにかくイタリア産などに頼らざるを得ない。日本からも、果物などを輸入する余地はあるのだろうか、と彼はいつも思うのであった。

しばらくしてその店を出ると、ちょうど帽子屋さんの前で、彼女が待っていた。

グレーのコートに白いマフラーを身につけ、茶色いニットの帽子から長い黒髪がはみ出ている。かたや彼は、茶色のコートに黒いツバのついた革の帽子だった。

「あ、津軽さん？ 待たせちゃった？」

「いいえ、こちらこそ……」と彼女が、にこやかに会釈をする。ほつぺたが少し赤いようだ。

「寒いですね。中に入りましょう」

イサムが帽子屋さんのドアを開けると、チリン、とかわいく鈴が鳴る。

店のおばさんが顔をあげ、

「来た、来た、新参者が」といった態度で二人を迎えてくれる。

周りには、きれいに柵が張り巡らせてあり、お客さんがしきり

に帽子を選んでいる。

マミは、被っていた茶色いニットの帽子を手にしながら、「これよりも厚手の、フカフカのが欲しいんです。まだまだ雪、降りますよね」と彼に言った。

そして取替え引き換え、思いつくままに棚の帽子を被ってみる。お店のおばさんも、にこやかに色々勧めてくれる。

彼女は迷いながら、お店の品物をしきりにチェックする。

「ちょっと高すぎるわ……どうしよう」

そこでイサムが店員に何やらささやいた。すると彼女がうなずき、何やら奥の方から出して来るではないか。

それは、白と茶色の暖かそうな毛皮の帽子だった。

「あっ、これ可愛い！」と、マミは歓声をあげながらそれを取り上げ、鏡の前で被ってみる。

「結構、似合うね」と、イサムが薦める。

「へえ……これ、何の毛？」

「多分、ウサギだろうね」

彼女はもう一度、鏡で自分の姿を確認し、それ以上迷うことなく、決めてしまう。

店員が少し安心したような表情で、品物を包んでくれる。

「良かったね」

「うん。ほっとしたわ」

彼女が支払いを済ませ、品物を受け取ると、

「ダンケ・シエーン。アウフ・ヴィーターゼーン」と、嬉しそうに店員に挨拶した。

「ビット・ゼア」と店員が答える。

お店のドアをイサムが開けると、チリンと鈴が鳴る。

「このドイツ語、変わっているでしょう？ 関西弁みたいに軟らかくて」

「そうね。『こんにちは』もグーテン・タークでなく、グリユス・ゴットだし」

「ミュンヘンの方言に近いんだ」と言って、イサムが地元民の常識を振りかざす。

彼女は外に出ると早速、新しい帽子を被ってみた。

「暖かい！」

そして彼らはシンガー通りを抜け、シュテファン広場に出てる。

あの重々しいシュテファン寺院が、目の前に迫ってくる。

この教会は、高さが百四十メートル近くにもなるので、遠くからも見えるウィーン中心部の目印。二つの塔は、高さも形も不揃いだが、とても重厚な伽藍で、長い年月を物語る貫禄がある。

屋根には色鮮やかなモザイクが施されており、ハプスブルグ家の紋章である双頭のワシが描かれている。その昔、モーツァルトもここで結婚式を挙げたらしい。

「コーヒーでも飲まない？」とイサムが彼女を誘う。

「そうね」と言いながら、彼女が手をこすり合わせる。

二人は迷うことなく、広場のカフェ「アイダ」を目指した。

東京で言えば、六本木の交差点にある「アマンド」くらいによく知られた店である。

中に入り、ほっと息をつくると二人は帽子や手袋をとり、コートを脱いだ。

彼女は、紺のジャケットに黒いスカート。格子縞の黄色いブラウスが襟を飾っている。

イサムはまるで儀式のように、コート類を入り口近くの洋服掛けまで持っていく。テーブルに帰ってきたところで、

「どうも有難う」と、彼女が迎えてくれた。

「ここでは防寒具の着脱が、風物詩なんだ……」と、彼が自嘲気味につぶやく。

「私、グリウンター（緑茶）にしようかな」と、彼女が言った。そう言えば隣のテーブルでも、グリウンターを飲んでいる。

「僕も、それにしよう」と言いながら、彼がウエイトレスを探す。

「お蔭様で、すてきな帽子が手に入ったわ」

「良かったね、気に入ったのがあって」

ようやくウエイトレスが来てくれた。

イサムが注文している間、彼女はガラス越しの景色に見入っていた。

左手の薬局の前には、モーツアルトの時代からタイムスリップしたような、派手な赤い上下をまとった若い男女がいて、ビールを配っていた。どうやら、ベルヴェデーレ宮殿で演奏会があるらしい。

二人とも昔風の短いズボン姿で、膝からは白い靴下。足もとにはストーブらしきものが置いてあるが、寒そうに手足をこすり合わせている。

「本当は強いお酒が、一番温まるんだろうけどね……」と、イサムがほつと息をつきながらコメントする。

「国谷さんは、札幌の御出身でしたよね？」

「そう」

「なら、寒さも、平気じゃないですか」

「いやあ、ここはずっと北で、大体サハリンの南くらい。だから、来た頃はとても寒くて……」と、イサムが開陳する。

「私なんか東京だから、とてもだめ……」

「津軽さんって言うと、青森の響きも、ありますよね……」と、彼が探りを入れる。

「そうねえ…… ルーツには、それこそ恐山系もいたらしいけど……」
ウエイトレスが、緑茶を運んできてくれた。

「ダンケ…… イタコさんですか？」と、彼が話を続ける。

「ええ……」

「御自身にも、霊能力とか、あるの？」と言いながら、彼がウィンクする。

「神頼みくらいは、するけど」と言って、彼女が笑みを浮かべる。

「怒らせると、怖いんだね、きつと……」

「そうですね、アツハツハ……」と、彼女がおかしそうに笑った。
「そう言えば、津軽さんが入りたいのは、どの楽団でしたっけ？」
「アウガルテン管弦楽団って、御存知？」と答える彼女は、自信がなさそうだった。

「へえ……結構、有名。うまくいくといいね」

「六月のオーデイション次第なの……シューベルトの曲なの……」
「きつとうまく行くよ、ここで勉強すれば……シューベルトはウィーンで生まれ育ったんだ、モーツアルトやベートーヴェンと違って……」

二人はすっかり温まり、防寒具を再び身にまとうと、満足そうにカフェから外に出た。

そして、シュテファン広場を横切る。

白く、大きな記念碑が近づいてくる。てっぺんには、金の十字架。十七世紀にペストの災厄が終わり、神に感謝するものだが、遠くから眺めると、まるで巨大なバナラ・アイスクリームのかたまり。「英雄広場まで、行ってみようか」と、イサムが持ちかけた。

「ええ」

「実は、シーズンになると、日本人観光客のツアー・ガイドも時々やっていて……」

「へえ……私、おのぼりさんなんだ」

動いている間は、多少なりとも寒さを忘れることができる。二人のはく息が白い。

道沿いには、たくさんのお土産屋さんや骨とう品のお店が並んでいる。この辺は観光名所がたくさんあり、イサムはツアー・ガイドよろしく彼女を案内していく。

二人が赤信号で立ち止まると、向こう側はホフブルグ宮だった。「ウィーンは、パリの縮刷版のようだって言うわよね」とマミがコメントしたので、彼が解説を試みる。

「オーストリアのハプスブルグ王朝とフランスのブルボン王朝は、ライヴアルだったんだ。」

「マリア・テレジアって、いるよね？」

「十八世紀にハプスブルグ家に男性の継承者がいなくてマリア・テレジアが女帝に即位したら、見事な治世を築いて……その皇女マリー・アントワネットは、フランスのルイ十六世の妃になったけど、千七百八十九年にはパリで革命が勃発。彼女は夫と共に、犠牲になる」

「知っている」と、彼女が反応する。

「そしてナポレオンが現れ、ヨーロッパを大戦争に巻き込むけど、ついに彼も敗れてパリが陥落するんだ。」

「一八一四年に、あと片づけのために各国代表がウィーンに集まったら、久しぶりの平和にリラククスし、酒とバラの日々になっちまったらしい。会議は進まず、ひたすら踊るんだ」

「有名な話よね」

「ところが、ナポレオンがエルバ島から脱出したので、漸くみんなが真面目になれた。あのホフブルグ宮では、ウィーン会議当時、各国の元首が寝泊りしたんだ」と、彼がようやく結論に導く。

「へえ……そんな時代に、タイムスリップ」と、彼女。

信号が青になった。

「建物や町並みが、本当によく保存されているよね」と言いながら、イサムは彼女を促し、道を渡りはじめる。

「今にもその辺から、ベートーヴェンとか、出てきそうね……」

「ここはやっぱり『おヴィエンナ』。ヴィエンナ・ランド」と、彼がつぶやいた。

「国谷さんは、プロのガイドなの？」

「ガイドは休日だけ。ここの日系の商社に勤めていて……」

「へえ、そうなんだ」

道を渡るとやがて、王宮へと続く大きなミハエル門が、壮麗な姿を現わす。全体的に白いが、ドーム屋根だけパステル調の青緑色

をしている。

二人は、大きなトンネルのような長いアーチに入っていく。あたりが次第に暗くなり、いやが上にも空気がひんやりとしてくる。

左手のお店では、繊細で色彩豊かな刺繍工芸「プチ・ポワン」がウィンドーを飾り、通りすがりの観光客を引き寄せている。

そしてどこからともなく、パツコロ、パツコロと蹄の音が響いてくる。

そうこうするうちに、向こう側から光が差し込み、英雄広場が目の前に広がる。

広場には、何台もの二頭立て馬車がお客さんを待っていて、たくさんのハトが、地面をつついていてる。

「開放されるわ」と彼女が嬉しそうに言う。

「この辺は季節が良いと、一面の芝生でね。ところで、近くに御親戚とか知り合いとか、いないの？」と彼が尋ねてみた。

「ドイツのミュンヘンに居ることは、いる。それに、マエストロ・フィツシュマンも……国谷さんは？」

「強いて言えば、ブン屋さんの萩谷君かな。彼とは、小学校が一緒でね……バツタリと遭遇したもんだよ……」

「おもしろい」

ホフブルグ宮殿の白く大きな建物は、底面が弧を描いた形をしている。二段構えであり、下の階にはアーチ型の大きな窓が等間隔で並び、上の階にはギリシャ風の円柱がきれいに並んでいる。

建物の中央手前には、乗馬姿の將軍の、大きな銅像。

「誰だか、知っている？」とイサムが尋ねてみた。

「オイゲン公？」と、彼女が自信なさそうに答える。

「そう。彼は負け知らずの將軍で、トルコやフランスと戦った御褒美に、ベルヴェデーレ宮殿をもらったんだ」

「ええ」

「今ではクリムトの絵があつて、結構、退廃的だけど……庭のスフィンクスも何となく、芸術的で……」と、イサムが考え深げに言う。

「シェーンブルン宮殿の方が、凜としている」と、彼女が応じる。
「そう、あっちの方が開放感もあるよね。丘の上のグローリエツテも清々しいし……」

「モーツァルトが子供の頃に招かれて、マリア・テレジアの前でピアノを弾いたのよね」と、彼女が伝説的な話に触れる。

「そうだったね」

「そこで、幼いマリー・アントワネット姫と遊んだの」と、彼女がフォローする。

「そう……その場で彼女にプロポーズしたらしい」

「幼い頃から、天才の誉れ高くて……」

「ところで、芸術とか音楽は、意識と潜在意識の葛藤から生まれるって、聞いたことある？」と、彼が突然話題を換えた。

「何、それ？」と、彼女が瞳を輝かせながら応じる。

「アーティストはみんな、すごい勢いで分裂気質で、精神的なストレスが強い。だから、そのはけ口として創作に走るらしいんだ」

「そうかなあ……ミューズの神様が、インスピレーションをくれる、と言うけどね……」

「ミューズの神様って、ひょっとして、潜在意識なんだろうか」

「分からない」と、彼女がわざとつばく瞳を輝かせながら言った。

王宮の建物を見上げると、屋根の縁にはギリシャ・ローマの古典趣味の人物像が並び、てっぺんには青空をバックに、ハプスブルグ家を象徴する双頭の鷲が大きく翼を広げていた。

「ここは彫像が多いわね。装飾もすごいし……」と彼女が言った。

「そう、装飾天国だね。何世紀も前から、設計士が観光客を意識していたみたいで……」

二人で王宮の中に入っていく。素晴らしく高い天井に、広々としたホール。階段のステアケースが壮麗で、念入りに彫刻や装飾が施されている。全部、大理石の固まりだ。美術品がたくさん置いてあり、まるで王朝時代の映画のセットのよう。

「地階が結構面白んだけど、行ってみる？」とイサムがいたずらっぽい表情で言った。

「……ええ」

「音楽家、冥利に尽きるんだから……」と言いながらイサムが彼女を連れて地階に下りていく。

地階は、古楽器の博物館だった。

階段を降りてすぐ入った部屋には、誰もいなかった。

そこかしこにガラス・ケースが置いてあり、年代物のヴァイオリンやチェンバロがディスプレイしてある。

「よく見ると、ベートーヴェンのピアノもあって……」

「シューベルトは？」と、彼女が言葉を返す。

「ほら、あれを見て」と、イサムが向かいの壁を指さす。

そこには、くねくねと長くて太い、大蛇のような吹奏楽器がかかっていた。

「あ、習ったことある。サーパントでしょう？」

「そう。よく知っているね」

「どんな音が、出たのかしらね」

「教えてあげる」

そこで彼は、人がいないのをもう一度確かめると、彼女の手を取りながら突然、目にも止らぬ速さで頬に口づけしてしまう。

彼女は一瞬驚いた表情になり、やがてにっこりする。

二人はそこから手に手を取り、すばやく次の展示室に抜けていった。

地上階に戻り、彼女が言った。

「私、オーデイション用の楽譜を買わないといけないの。この間、やっと曲目が発表されて……」

「それじゃあ、ドブリンガーにでも行こうか」と答えながら、イサムが玄関の重い扉を開ける。

外の明るさに眼がくらむようだ。

二人は英雄広場を横切ると、狭い路地の中からドロテー通りを探し出す。

暫く歩いているうちに「ドブリンガー」の看板が見えてくる。イサムがドアを開き、彼女が先に店に入っていく。ミュージック・シヨップの中は、とても暖かい。

「ヴァイオリンの楽譜は、どこかしら」

その店はいくつかの部屋に分かれていた。彼女は、ヴァイオリンのコーナーに消えていく。イサムは、フルートの楽譜を見ながら時間をつぶすことにした。

ドビツシーとか、ラヴェルとか、フランスものが目に付く。

暫くすると、彼女が戻ってきた。何やら、不機嫌そう。

「在庫がなかったの……」

「シューベルトだね？」

「そう。ソナチネの三番、ト短調」

「へえ……注文した？」

「二週間かかるんですって」

「そのくらいは、しょうがないかも。楽譜の店は、ほかにもあるし……気分転換に、何か飲んでいかない？」と、彼が少し同情しながら言った。

「うん」

そこでイサムは彼女の手を引いて、通りの向かい側の、オープン・サンドの店に入ることにした。二人で、カウンターの前の列に並ぶ。「舞踏会の練習、結構大変だね」と言って彼女は、アルテドナウ・アンサンブルの話に戻る。

「大丈夫、じきに慣れるから」

「国谷さんの隣で、ファーストを吹いているのは、誰？」

「彼は韓国人のチュンさん。IAEAの職員で……」

「へえ……そうなんだ。彼って、ハンサム。私、カプチーノを飲もうかな」と言いながら、彼女が冷たい頬を手で覆う。

その後、二週間も経過しただろうか。

イサムは朝早くから、出かける仕度をしていた。外に出ると異様に寒く、吐く息が白い霧になってしまう。

五分も歩くと、地下鉄の入り口があった。

階段を下りたところで、機械に回数券を通す。

カチャン。

上り下りする人はみな、エスカレーターの右側に立っている。

地下鉄では、みんな静かだった。観光客以外では、老人の姿が目立つ。

しばらくすると、シュテファン広場駅に到着。

地下鉄の広い階段をのぼると、目の前にシュテファン寺院がそびえている。すでに、たくさんのお客が集まっている。

空気が、とてもすがすがしい。

イサムは、石畳を歩き始めた。

十分も歩いただろうか。

教会が見えてきた。すぐそばには、エビヤスモークド・サーモンをオープン・サンドイッチで食べさせるお店。

出勤途上なので、時間があまりない。

彼はママの住所を確認すると、そこに大きな郵便受けがあるのを見つけ、彼女の捜していたシューベルトの楽譜を投げ込んだ。

「ああ、良かった。これならオフィスにも、間に合うだろう」
始業は、八時半だった。

あとがき

私がフランス・ローレイ氏に初めて出会ったのは、今から約五年前のことでした。

彼とは仕事上、ふとしたことから東京から遠く離れた所で、一週間ほど寝食を共にして酒を酌み交わすこととなり、気心が知れるようになったのです。その時の仲間は総勢二〇名ほどいて、今でも季節の挨拶くらいはしています。

彼はいわゆるハーフの日本人で、その生い立ちゆえ、精神面に西欧系の文化・風俗の影響を強く受け、刺激的で風変わりなところがありました。普通のサラリーマンながらクラシック音楽を趣味とし、その延長からドイツやオーストリアの文化への憧憬のある人でした。

我々の共通の趣味が、西ヨーロッパの歴史研究であることが判明し、それを良いことに銀行家のS・F・氏と共に、呑み助の会をたびたび開いていました。

そのうちローレイ氏が本を書いていることを知るようになり、彼の書いた物語を、おそろおそろS・F・氏と共に読む光栄に与りました。

その著作は四八歳で書いた処女作のようなものであり、御本人としては自己満足しか念頭になかったのでしょうか、意外と面白い部分もあったのでS・F・氏とも相談の上、当時少し元気のなかつたフランス・ローレイ氏の激励を兼ねて、世に問うこととした次第です。

なお同氏によれば、作品中の「幽霊症」の効果的な予防法・対処法は、下記のとおりです。やや風変わりながら、御参考までに掲載する次第です。

1・太陽にあたる事

日中の外出は、精神（そして肉体的）衛生の観点から重要。
特に朝の散歩を励行すべし。

2・屋外で体を動かす

スポーツや運動により、血流を良くすると共に気分転換を図り、
もって精神統一を。できれば、呼吸のコントロールや腹式呼吸を伴
うもの。

有酸素運動

酸素は運動機能系に優先的に供給される

その他は酸素不足に陥り、悩む余地はなくなる。

腹式呼吸では「ハアーツ、ハアーツ」と

下腹の力で口から息を吐き続け
る

続けているうち

に「無念無想」の境地へ。

3・屋内では

(1) 部屋を明るくすること。

(2) ラジオ体操、太極拳等。

ストレッチングの前には、両目の間に手刀等で仕切りを入れ、
視野を二分割。そしてハアーツと息を吐くこと。すると筋肉がリラ

ツクス。

(3) 手指に至っては、仏像のいわゆる「印相」の様々なスタイルを真似てみる。

(4) 足の指の運動。普段使わない十本の足の指を運動させる。五本指靴下をはくと、血流が促進される。

(5) 様々な「踊り」のポーズを参考にしながら、テンションを上げる。

(イ) NZのマオリ族の「戦いの踊り」：舌を突き出して上下に動かすと、アドレナリン分泌を促し、血圧が上がる。同時に両目がかつと見開くと、視野が突然広がり、光が入ってオタク・モードから脱出できる。

(ロ) 両足先を「ハ」の字を逆さにしたように開く。(バレリーナのポーズ)

(ハ) タイの民族舞踊での、手指の先を反り返らせる仕草も。

(6) 座るときは、両手を肩幅以上に開いて机やテーブルに乗せ、安定感を。そして周囲の人間と同じ高さの視点を持ち、協調性を。

(7) 横になり、リラックスする時は、足の位置を頭より高くする。

(8) 左利きなら右手を意識的に使い、刺激する 神経系統が交差しているため、左脳を刺激してテンションを上げ、精神統一を助ける。

ば右手で箸を使ってみる)

(例え

(9) 手のひらに中国の「健身球」のようなものに乗せて強く握りしめ、両手のツボを刺激する。(神経系統は脳幹につながっている。心臓から遠い右側を重点的に) 足の裏のツボにも、竹を踏む要領で、刺激を加える。

4. マッサージ

(1) 頭、うなじ、首から肩、背中にかけて、徹底的な肩たたきや肩もみ、マッサージをする。

(2) 両の耳たぶを引っ張る 覚醒効果が得られる。

(3) 頭の両側から、両手で耳に対し、シンバルを打つように圧迫を加える。

これを「フガフガ」音が聞こえるまで繰り返す。

5. 声を出す

「あ」を発音する時のように口蓋を開けると、開放感が得られる。

(1) 声が出るように、喉仏の周辺を手で引っ張って広げる。

(2) 天井や周囲の壁に向けて声を出し、その反響・反射を確認する。

もって自分の健康状態を確認する。

声が出ない時は、喉のチャクラ(つぼ)にトルコ石を当てて息をはく。

(3) 積極的に会話を心がける。話し方は穏やかに、ゆっくりと。

(同時にアイコンタクトを心がける コミュニケーションが円滑に)

(4) 口を大きく開き、合唱、あるいはカラオケ等で歌う。

(両手で下アゴを大きく押し開くことから始める)

(イ) 自己顕示欲を満たし、ナルシズム。

(ロ) リズムに合わせるので、精神的規律や生活リズムの回復にも有用。

(ハ) 気分の高揚には、特に「あ」行を発声すること。

(ニ) 腹式呼吸。

(ホ) 頭のとっぺんから声を出すこと。

6. 脳髄直撃系

(1) せんべい、たくわん等、食べるときにカリコリ、パリパリ、脳髄に大きく音の響くもの、あるいは、歯ごたえのあるもの(例えばタコやスルメ)を顎の運動のつもりで噛みしめながら咀嚼する
気分転換とストレス解消に。

(2) 同様の目的でアイスクャンディー、かき氷等、冷たさが脳髄にしみわたるものを食する。

(3) 肩たたきの要領で、首の後ろ(両耳の下)の位置に「空手チヨップ」を何発か加える。

(4) 歯医者

歯医者には、積極的に行くこと。

歯の治療は、ドリルの振動を脳髄に直接伝えるので、全ゆる悩

みを治める効果あり。

7・仕事や趣味に熱中する。

集中力を要する作業に打ち込み、精神統一を図る。

もって悩み、考え込む余地を排除。(肉体労働は、特に効果的)

8・五感それぞれに刺激を加え、あるいは遮断する。

(1) 聴覚

耳栓やヘッドホン。(時々、両方同時に付けてみる)

(2) 視覚

(イ) 左右の目の間に仕切り(双眼鏡や望遠鏡でもOK)を入れて視野を二分割。

もって右脳、左脳の双方をフルに稼働させる。(天体観測や

探鳥)

(ロ) チェス盤やギンガムチェック等の市松模様を凝視する

錯視による集中力の低下・リラクゼーション

ン

(ハ) はでな色や多様な色、模様を見て気分転換する。(カラーセラピー)

(ニ) 嗅覚 香を焚く。アロマセラピー。(例えばサンダルウッド)

(ホ) 味覚 香辛料、スパイスをはじめ、覚醒するようなものを食する。例えば生玉ネギ。

ミン茶等。

あるいはリラックス効果を狙い、日本そば、銀杏、ジャス

9・栄養サプリ

マルチ・ビタミンやマルチ・ミネラル。

沈静効果のある柿茶、黒ゴマ等。

10・決断力に乏しい時

(1) 黒と言えば白、右と言えば左等、「あまのじゃく」的「迷いのために決断がつかない場合は、逆の主張を想定してみる。

Aを選択したい場合は、逆説的にnot A(あるいはnegation A)を想定してみるのである。

(2) 弓矢的を射抜くように、リズムに乗りながら速いスピードで第一印象による判断を既成事実化してしまう。(悩む時間をなくす)

11・ナンセンスの活用

ギャグをはじめとするナンセンスは、象徴的な意味のある言葉の連鎖、しかるに論理の連鎖、すなわち真面目な思考による悩みや疑心暗鬼から、自らを解放する効果がある。

ユーモラスで明るい発想のもとに気分転換をはかり、精神衛生を保つべし。

12・文化的な手法

音楽を演奏する、絵を書く、小説を書く、料理等により、

能動的に自らの感情をあらわにし、表現する

気分的もやもやの発散 癒

し効果。

13・楽観主義 (Optimism)

暗い発想や疑心暗鬼あるいは邪推の連鎖から自らを解放つこと。

よ。少しでも過去の問題を忘れ、周囲の物理的居住環境に目を向け

14・社会的な明るさ

明るさを保つためには、積極的な努力、すなわちカロリー消費が必要。

15・スキンシップ

周りの人間とのスキンシップを図り、仲間意識を醸成すること。西洋社会では、スキンシップの一種である「握手」から挨拶が始まるが、相手と距離を置いて「おじぎ」をする日本社会では、別の方法で実現する努力が必要。(例えば代償行為としての水泳や入浴、温泉入浴。あるいは犬猫等ペットを飼うこと)

16・体内電気の調整

神経系統では、ナトリウムイオンやカルシウムイオンを駆使する。

ニューロンを駆け巡る電気信号やシナプスの化学信号により、刺激を伝達するのだが、これを酷使すると神経衰弱に至りうる。

回復のためには、微弱電流を体内に流す発想が必要。

「肩こり用」として市販されているゲルマニウム、チタン等を用いた器具には、そのような効果が認められる。

しかし手じかなのは、半導体が豊富に使用され、しかも電池入りでマグネット効果もある携帯電話等を、手で握りしめること。

(但しその通信機能は、使用しない方が疲れずにすむ)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8403d/>

ウィーンに出たあまのじゃく

2009年7月4日20時45分発行